最高位だった堕天使の置き土産

凌田 葭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最高位だった堕天使の置き土産

【Ｎコード】
Ｎ００３４Ｕ

【作者名】
凌田　葭

【あらすじ】
今までと変わらない日常を過ごし、一般的と呼ばれるに相応しい生活を送ろうと考えていた少年『凪裂　刻』
だがしかし、彼には堕天使ルシフェルの記憶があった。彼は呪受者と呼ばれる、異能を使役するものに命を狙われるはめになっていく彼を巻き込んだ少女、友人、学校、呪受者とのバトル、さらには天使まで出てきて、今まで平凡だった主人公の日常が変わる

プロローグ～堕天～

神話において神に氾濫を起こしたもの

――――ルシフェル

神に勝るとも劣らない力と知性を持っていると謳われるほどの力を持ちながらも、その非凡なまでの才能ゆえに驕り、今の神などよりも自分のほうが神に相応しいと考え、神を殺すことを考えた。

ルシフェルは必ず神を殺せるという確証があった。何故なら、神は彼に絶対の信頼を抱いていたからである。

しかし、実際は違った。

ルシフェルは神に奇襲を仕掛けるために神の住む居城に攻め込んだ。だがそこには、彼が来ること事前に知っていた神が準備した天使の兵士たちが待ち構えていた。

結局、ルシフェルは戦いに敗れ、彼は『天界』を追放され、『堕天使』となるはずだった。そう、ただ単に、堕天するだけのはずだったのだ。

確かにルシフェルは『堕天使』となった、『天界』に一切干渉をすることのできない『地獄』に堕とされた。だが彼は極東の島国である日本に七種の石の中に自分の力を注ぎ込み、各地にばら撒いた。

その石の所有者は人知を超えた力が使えるようになるという・・・・・・

第一話　朝

――――日本某都市地区の郊外「七受市（ななうけし）」

七受市は住宅ばかりではあるが、場所によっては人で賑っている場所もある。その七受市のとある住宅街の一軒家から目覚まし時計のけたたましい音が聞こえた。

その一軒家の目覚ましの音が聞こえる部屋のベッドの上で布団に包まってがんとして起きようとしない少年がいた。しかし、数分後には耐えられなくなり、少年はあきらめて布団から這い出て目覚ましの音を止めた。

「相変わらずうっさいなこいつは」

と少年、「凪裂（なぎさき）　刻（きざみ）」はその手に持った目覚ましをけなした。刻の持つ時計は一人暮らしの彼の寝起きの悪さを解消するために友人からプレゼントされたものだ。しかし、そのあまりの音に初めて使った朝にベッドから転げ落ちてしまい、何事かと思ってしまうほどの音である。

だが何日かすると、びっくりすることもなくなったが、変わりに目覚ましとの寝続けるか起きるかの戦いが始まったのである。ちなみに、刻の戦績は今のところ、目覚ましが７８５勝０敗である。

「ふぁーあ、さてと、着替えるか」

そう言って刻は、学生服に着替え始めた。刻は今年の春に高校に入学し、刻の通う『静華高校（せいかこうこう）』は男女共学、偏差値・中の上、校風

は自由ということで知られている。

着替え終わった刻は階段を降り、一階のリビングへ向かった。リビングには誰もいなかった。

刻は食器棚の隣にある二人の男女の写る写真の前に向うと手を合わせて目を瞑り、しばらくすると、目を開けた。

「父さん、母さんおはよう」

刻が話しかけたのは彼の両親の遺影だった。

刻の両親は刻が中学二年生の頃、父親と母親が車で買い物に行った時に誤ってハンドルを切ってしまい、ガードレールにぶつかり、亡くなった。

刻の父親、母親への挨拶は最早、日課となっており、朝一番にやるのがこれである。その後簡単な朝食をとり、

「行ってきます！」

刻は両親にそう言って、学校へ向かった。

＃　　＃　　＃

家を出てしばらく道を歩いていくと、『木のトンネル』という愛称のある並木道に出た。そこには、同じ学校の制服を着ている男女がまばらにいた。

「今日も普通で平和だなぁ」

と、刻が呟くと、後ろから肩をポンっとたたかれた。

「よっ！ギザミ！おはようさん」

「なんだ、氷我思(ひがし)か、ていうかだれが、青くて鎌の付いた甲殻類だ・・・」

「いや、俺が言ったのは赤くて黒い頭角を背負った・・・」

「亜種かよ！って、どーでもいいわ！たく、朝から疲れさせんなよ・・・、このイースト菌が・・・」

「おいおい、いくらなんでも菌類はないだろう・・・」

と、刻と軽口を叩き合う刻に氷我思と呼ばれた少年は仁思(にし)　氷我(ひが)思(し)といい、刻の中学からの親友又は悪友である。短い髪で眼鏡をかけていて、刻より数センチ背の高い、いかにも高校生らしい少年である。

氷我思は武士の家系であったそうだが、特にあれをやれこれをやれと言われたわけではなく、自由にさせてもらっているそうなのではあるが、氷我思は学年のトップクラスであり、刻のクラスの学級委員でもある。言われてるわけでもないのによくできるものだと刻は前から思っていた。

そんなことを思っていた時、後ろから「おはよう」という声がした。

「お、氷我思、相方が来たぞ！」

「「誰が、相方だ！！」」

「うおっ！！！」

と刻がこれまた軽口を言ったのは、ショートヘアーに、ヘアピンで左側をとめた少女がいた。

少女の名は喜多見（きたみ）　那実（なみ）といい、氷我思の幼馴染である。

那実は刻とも仲がよく、よく三人とこの場にはいない他二人と共によく遊んでいる。勉強のほうは氷我思とは対極的で、赤点は取らないものの、危険ラインである。しかし、彼女は類まれなる才能から、運動が得意、むしろ得意とは言えない位のレベルである。那実と氷我思は親同士の繋がりから幼いころから遊んでおり、喧嘩をすることもあるが、それは小さなことであり、一日もたたないうちに終わってしまうほどである。

因みにこの二人の喧嘩は日常茶飯事であり、この二人の名前に「北　南　東　西」が含まれることから、この二人の喧嘩を「コンパス喧嘩」と呼ばれているのである。

「悪かった悪かったって」

「「分かれば宜しい！」」

補足を言うと、この二人のシンクロっぷりは、脱帽ものであり、本人たち曰く「意識はしていない。したくもない」とのことである。

「ほんとお前ら息ぴったりだな・・・。お前ら結婚しろよって意見が俺のところに、何件もきてるから、とっとと、結婚してよ・・・」

さらに付け加えて、この二人に茶化しを入れると・・・

「な、な、な、なんでそうなるのよ！だれ！？誰よそんなことをいったのは！？」

「え、まじで！？やった！！なあ那実、何時式挙げようか？あ、その前に、ウェディングドレスを選ばないとな！！」

「て、あんたは何調子乗ってんのよ！！挙げないわよ式なんて！！」

「え！！！そ、そんな、那実、あの時の言葉は嘘だったのかい？」

「何も言ってないわよ！！」

「そ、そんな、じゃじゃあ、俺を騙したって言うのか！！そ、そんな・・・」

「だから何も言ってないっての！！」

と、こんな感じに那実は馬鹿正直に受け止めてしまい、暴走。氷我思は悪乗りをして、那実をさらに暴走させる。といったようになってしまうのであった。

いい加減に二人のやり取りに飽きた刻は二人をとめるためにために仲裁に入った。

「那実、おーい、那実ってば」

「何よ！あたしはこんなやつと結婚なんか絶対にしないからね！」

「いやいや、だからそれただの冗談だよジョーダン」

「え・・・、まじ？」

「うん、マジ」

「あーよかった、こんなやつとの噂なんて真っ平ごめんよ、あーよかったよかった」

「悪かったなこんなやつで・・・」

「まあまあ、そろそろ学校にいこうよ時間も時間だしね」

氷我思と那実が時計を見るとすでに８：１５を示していた。

「あ、ホントだそろそろいこっか。あ、そうそう刻、あんたアタシのこと侮辱したから、ジュース一本奢りなさいよね」

「あ、じゃあ俺も刻の奢りで」

「げ、お前等なぁ・・・」

「とーぜんでしょ、アタシに恥をかかせたんだからね」

と那実は言いながら歩いていってしまったので、刻と氷我思も那実を追いかけるようにして歩き始めた。

第二話　日常の朝

那実と氷我思にジュースを奢るという約束をこじつけられた刻は二人と並列して少々気だるい思いで歩き、しばらくして刻達の通う静華高校(せいかこうこう)が見えてきた。

静華高校は去年から新校舎を建て始め、刻達の入学する二週間ほど前に完成したばかりであり、刻達新一年生も含めた全校生徒が今は新校舎で勉強などをしている。

静華高校は実は舘原学園(たちはらがくえん)というの高等部にあたるのだが、なぜか『舘原学園高等部』ではないのだ。前に学園長が『ずっとこの学園にいたら変わらない学校名で飽きるのでわないか』と言って半ば強引に中等部を『樹岱中学(じゅたいちゅうがく)』、初等部を『啓従小学校(けいじゅしょうがっこう)』と銘打っているのだと刻は聞いたことがあった。しかし、学校内では高等部、中等部、初等部と呼ばれている。因みに大学もあり、こちらは『舘原大学』と学園の名前が使われている。

高等部と中等部は近くにあるのだが、初等部とは離れておりあまり見かけない、というかまず、入る門も違う。同じ敷地内にあるのだが、この舘原学園はとてつもなく広いため門がいくつもあり、大学の近くの門を北門、初等部の近くの門を南門、刻達の通う高等部と中等部の近くにある門を東門、そして今はあまり人の訪れなくなった旧校舎に最も近い西門、といった風にあるのである。だから、高等部生は中等部の生徒以外あまり見ないのである。

刻達が東門を抜けると目の前には新校舎があった。そこに高等部生と中等部生が入っていった。前から高等部と中等部は近かったのだが、今は中央棟があり、そこで繋がっているのである。刻達も高

等部側の玄関に入り、靴を履き替えていると那実が「またか・・・」と呟いた。

「どうした？また入ってたのか？」

「えぇ、あぁ、うん」

那実は運動神経が神がかっており、すでにソフトボール部に所属しているのだが、ほぼ毎朝彼女の元に部活勧誘のラブレターが入っているのだ。部活の勧誘はバレーボール部、テニス部、陸上部、バスケットボール部などたくさんあるのだ。氷我思は剣道部に所属しており、実は自由であることの変わりに、例外として剣の基礎を学ぶために学校では剣道部に、家では祖父の道場で剣を学んでいるのだという。因みに刻は何部にも所属しておらず、毎日授業が終わったらかえるの毎日である。氷我思から「お前も何かやれば？」と言われたがどの部活も自分にはあわなさそうと感じ、刻は帰宅部なのである。

「はぁ、毎回こんなのが来ると思うと何だか萎えるわ・・・」

「まあ、確かに何回もあると萎えるな・・・。」

「ホントよたく、こっちはいい迷惑だっての！」

「まあまあ落ち着けって、ほら、早く教室に行こうぜ」

氷我思がそういうと那実と刻は自分達の教室へ向かって歩き始めた。

一年生は４階で、二年生は３階、そして三年生は２階に教室があ

る。刻達は下駄箱付近の階段で４階へ向かった。

４階に着くと刻たちは自分達のクラスであるＡ組に入った。刻達は皆同じクラスで、席も近い。自分達の席に鞄を置くと見計らったかのようにある少年が刻達に話しかけてきた。

「今日は少々遅かったでござるなぁ、氷我思殿に刻殿」

「お、剣吾か、おはよう」

「おはようでござる」

この何やら武士の様な喋り方をする少年は『鎖島　剣吾』といい、氷我思の部活仲間である。氷我思のことをえらく気に入り、氷我思の友達ということで、刻も話すきっかけを持ち、剣吾と友人になったわけである。

剣吾は氷我思同様に幼少のころから剣道を学んでおり、何度か大会で優勝したことがあるという。彼は武家の子孫らしく、そのため剣を学んでいるのだという。そのことから氷我思と意気投合し、今に至るのである。

「ところで、あいつはどうしたんだ？」

と、此処にいないもう一人の友人のことを刻が訪ねると

「む？あいつというのは、磨輝殿のことでござるか？確か、先ほどまでここらにおったでござるよ？」

「こっこだよーん！！」

「うひゃあっ！！」

いきなり、間の抜けた声が聞こえたと思ったら、那実が変な声を上げた。

那実の方を見ると身長が刻の胸ほどしかない少女が、那実の胸を鷲掴みにしていた。

「ま、磨輝！や、やめなさい！！！」

那実がそういって磨輝と呼ばれた少女を捕まえようと手を伸ばすと、少女はするりとよけて剣吾の後ろに隠れた。

「うひゃあ、剣ちゃん助けてー、ナミミンが苛めるよー」

「そんなことをしては駄目でござるよ、磨輝殿？那実殿に誤るでござるよ？」

「うぇーん、剣ちゃんのけちー」

「けちじゃないでござるよ。さ、謝るでござる」

「はぁーい、ナミミンごめんなさい」

「うー、ほんとは怒りたいとこだけど、ま、いいわ、許してあげる」

「わーい、許してもらえたー」

と、この無邪気な少女は『楓川　磨輝』といって、彼女も刻の友

人である。彼女は身長こそ低いものの、列記とした高校生である。彼女との出会いは異質というか、ある意味衝撃的であった。彼女は入学式の日にいきなり刻の背中に飛び乗り

『あたし楓川　磨輝お友達になってね！』

と言われ、勢いでうなずいてしまった。勢いでうなずいてしまったとはいえ、磨輝といると落ち着くと評判であり、刻もそう感じている。因みに彼女は入学式の日にすでに、友達百人越えを達成させていた。

「よかったでござるね。でも、あんまり人を困らせたりしたら駄目でござるよ？」

「はぁーい」

剣吾の言うことを何故か聞くことから、彼は磨輝の保護者役のような立場になっていた。本人曰く、自分でよければ喜んでやるといっており、実際子供の面倒を見るのが好きな用である。

キーンコーンカーンコーン

とありふれたチャイムが学校中に放送され、他の生徒達が慌ただしく教室へ戻ってきた。

しばらくして、担任の教師が入ってきてＨＲが始まった。

第三話　記憶

学校に着いてから朝のＨＲ、１時限目、２時限目と順に終わり、３時限目の『宗教学』という、静華高校の特殊な授業の一つだ。『宗教学』はその名の通り、世界中の宗教、さらに世界中の神話、すなわちギリシャ神話、北欧神話などの一般教養ではないため、何のためにあるのかと刻は考えたこともあった。その時に刻が調べてみると、どうやらまた学園長が「いろんな宗教の事を知ってもらい、教養を身につけてもらいたい」とのことで作ったと刻は聞いた。つまり、また学園長の権力であったのだ。

そんな、学園長の職権乱用によって作られた特別カリキュラムをまじめに受ける者はほとんどおらず、刻、那実に剣吾、更には磨輝も授業を受けようとはあまりしない。しかし、氷我思ただ一人はこの授業をしっかりと受けている。因みにこの授業にはテストというものは無い、しかし希望者にはテストが一応受けられる、が、勿論これも受験者はわずかしかいない。また、氷我思はこのクラスでほぼいない受験者で「無論受ける」と言っている。

今日の内容はキリスト教の七つの大罪についての授業である。

七つの大罪とは４世紀のエジプトの修道士エヴァグリオス・ポンティコスの著作に八つの「枢要罪」として現れたのが起源である。八つの枢要罪は「暴食（ぼうしょく）」、「色欲（しきよく）」、「強欲（ごうよく）」、「憂鬱（ゆううつ）」、「憤怒（ふんぬ）」、「怠惰（たいだ）」、「虚飾（きょしょく）」、「傲慢（ごうまん）」である。６世紀後半には、グレゴリウス１世により、八つから現在の七つに改正された。「虚飾」は「傲慢」に含まれ、「怠惰」と「憂鬱」は一つの大罪となり、「嫉妬（しっと）」が追加されたことにより、「暴食」、「色欲」、「憤怒」、「強欲」、「怠惰」、「嫉妬」、「傲慢」となっている。七つの大罪

には関連する『悪魔』がおり、前述の大罪の順に『ベル・ゼブブ』、『アスモデウス』、『サタン』、『マモン』、『ベルフェゴール』、『レヴィアタン』、『ルシフェル』となっている。

そして今は「傲慢」についての話を無精髭を生やした三十代の担当の教員がしていた。この教員は『辻風（つじかぜ）　紫勇（しゆう）』といい、何でも、大学の時に宗教にはまり、その後教職免許を取り舘原を受けたところ学園長が是非その宗教の知識を我が校で活かして欲しいとのことで静華に来たのだという。

「『傲慢』は高い自尊心、他人より重要、魅力的になりたいという欲望、賞賛をそれに値する者へ送ることの怠慢、過度の自己愛などを指しており、旧約聖書の『箴言』に「奢る者は久しからず」という言葉がある。自尊心或いは虚栄心は、自分の能力に対する過信を意味し、それは、神の恩恵を理解する上でのさまたげとなるという意味だ」

と担当教員がやや命令口調で説明していた。

「では・・・、凪裂、この『傲慢』に関連される悪魔とその悪魔に関してなにか答えてみろ」

「えっ！？え、えっと・・・」

（ま、まずい、辻風先生、答えられないマズいんだよな・・・）

この辻風は生徒に授業をちゃんと受けている、受けていないにかかわらず、ほぼ無作為に生徒を選び、質問をし、３回答えられなかった場合、否応に無しに宗教学のテストを受けなければならない。さらにこのテストで５０点以上を取れないと何かをされてしまうら

しい。この「何か」とは、未だ誰もそれを知らず、その事を辻風に聞いても「ククク、何、受けてみれば分かることさ。ま、どうなっても知らんがな」と、意味深な言葉を言ってそれ以上何も言わないため、皆いろんな噂が立っており、その中には口にも出したくないような内容もある。

「ククク、どうした？分からないか？」

（くっ、どうする、これで答えられないと、強制的にテストを受けなきゃならないじゃないか！くそ、まず、こんなの分かるわけ無いだろ！興味なんて無いのに・・・）

刻がなどと、頭の中で辻風に毒づいたが、状況は良い方向へ一切変わらない。むしろ、時間が過ぎてゆき、強制テストへの道が到達していきそうになる。

（仕方ない、ゲームで出てきそうな適当なモンスターの名前でも言って間違えておこう、そして今日から宗教学の勉強をしよう・・・）

「オルゴデミ・・・」

『・・・ル・・・フェル・・・』

「・・・・・・っ！」

刻が某ＲＰＧのモンスター名を言おうとした瞬間、脳裏に何かが自分に囁く様に言葉が浮かんできた。刻が周りを見回すと、他のクラスメイトが雑談などを止めて刻の事を何事かと見ている。辻風も何事かと見ていた。

「どうした凪裂？」

「え・・・、あ・・・、な、何でもありません」

『・・・ルシフェル・・・・・・』

（まただ・・・）

こんどははっきりと感じ取ることが出来た。この自分の頭に浮かび上がってくるものは刻には分からなかったが、目の前に迫る強制テストの方に意識がいってしまっていた。刻は先ほど言いかけた某ＲＰＧの魔王の名前ではなく

「ル、ルシフェル、ですか・・・？」

先ほど脳裏に浮かんだ事を刻は答えてしまった。「しまった」と、刻は思ったが、言い切ってしまったので、もうどうにでもなれ心境になったており、「テストだろうが、その次の何やら恐ろしそうなことでもやってやる」と腹を括っていた。しかし、辻風のほうを見ると、予想外の三文字が顔に書いてあるかのような、まさにその表情を浮かべていた。

「正解だ、よく知っていたな・・・」

「ど、どうも・・・」

刻の予想に反して、刻の言った答えはあっていた。

「では、その悪魔に関して説明してみろ」

今度こそ、終わったと思ったが、再び脳裏にまるで記憶の箱を引っ繰り返したかのように言葉が思い浮かんできた。

『「暁の子、ルシファーよ、どうして天から落ちたのか。　世界に並ぶ者のな　い権力者だったのに、どうして切り倒されたのか。それは、心の中でこううそぶいたからです。　「天にのぼり、最高の王座について、御使いたちを支配してやろう。　北の果てにある集会の山で議長になりたい。　一番上の天にのぼって、全能の神様のようになってやろう。」　ところが、実際は地獄の深い穴に落とされ、しかも底の底まで落とされます。と、イザヤ書に記されており、『地獄』に堕とされる前に、ルシフェルはとある島国に七種の石の中に自分の力を注ぎ込み、各地にばら撒いたのです」』

刻が自分の脳裏に浮かんだことをすぐに自分のことのようにしゃべっていき、それが終わった瞬間、他のクラスメイトがドッ、と沸いた。

「すげぇー、刻よく知ってんな！」

「実は影で勉強してたんじゃないの？」

などと、他の生徒が騒ぐ中、辻風が手を二回叩き、意識を自分の方へ向けた。

「んんっ！・・・凪裂、見事な語りだった。・・・が、残念だが私のテストを受けてもらう」

「え！？」

「確かにあっていた、しかしそれはイザヤ書の所までだ、ルシフェ

ルが島国に自分の力をばら撒いたなどという記術は無い。残念だが蛇足だったな」

「そ、そんな・・・」

刻は机にうな垂れた。しかし、辻風は冷や汗を背中に掻いていた。

刻が顔を上げた瞬間チャイムが鳴り、授業が終わった。

「凪裂、放課後に私の研究室に来い、いいな」

と、辻風はその一言を残して教室出て行った。

第四話　魔術と刻まれた記憶（前書き）

やっと本題に入ってきました！！読んでくださってる方お待たせしました！！

第四話　魔術と刻まれた記憶

三時限目の『宗教学』の授業において、辻風　紫勇の出した問いに正解することの出来なかった刻は、放課後に辻風の研究室に来るように言わた。そして今は指定された放課後である。

「はぁ・・・」

刻は辻風の研究室のある、学園の南西、宗教学研究棟、別名『地獄(ボラトリオブヘル)の研究棟』の前にいた。この研究棟は生徒達から「あそこに入ったら二度と戻ってこれない」、「変な儀式の生贄にされる」などの噂が立つほど不気味な研究棟。この研究棟は辻風が学園長に頼んで建ててもらったものであり、不気味な研究棟だが、外見だけは真新しさの残る建造物だ。二階建てで、地下にも一室あり、白い小さなビルのような外見だ。

「何されるんだろ・・・」

と、刻は一物の不安を抱えながら、研究等に入っていった。

研究棟に入ると目の前にいきなり床に幾何学的な模様があり、その中に三つの円があり最も内側の円がから中心に向かって何本もの直線や曲線が延びていた。刻は何だろうと思い、その模様に近づいてみた。

「何だこれ？」

刻がその幾何学模様に触れると模様が青色に発光始め、驚いた刻はすぐに手を離した。模様は離してからしばらく経っても輝き続け

ていた。

「な、何・・・！？」

模様をまじまじと見つめていると、不意にまたあの感覚が刻を襲った。

「っ！！」

刻に脳裏に何かがはしった。浮かび上がる映像。空に雲は無く、一面の青。地面は土ではなく、本来上を見れば浮かんでいるはずの雲が足元にあった。周りを見渡すと草や木、花や蝶などもいた。さらに中でも目を引いたのは自分の立っている雲の下には本来自分のいるはずの町があった。だが、次の瞬間今の町並みが荒野になったり、中世ヨーロッパのような町並みに様変わりした。まるでテレビのチャンネルを変えるかのように変わっていき、遂には恐竜のいる時代にまでなった。

「（何なんだこれは）」

自分はいったい何を見ているのか、いったい此処は何処なのか、何故雲の上に立てるのか等の疑問が浮かんだが、答えてくれる者は誰もいない。しかし、視界の外から誰かが話しかけてきた。

「――――――、どうした、こんな所で？」

後ろを振り返り、相手の方を向こうとした時にその映像が消えた。

「！！、はぁ、はぁ、な、なんだったんだ今のは・・・」

刻は酷く汗をかいており、呼吸も乱れていて、まるでマラソンを今の今まで走っていたかのような状態になっていた。すると何処からか、白衣を着た辻風が目の前にいた。辻風は刻の頭に手を乗せると、何かを呟き始めた。

「大地に眠りし力の根源よ、生命の根源よ、我にその力を使役させ、彼の者に癒しと活力を与えよ」

辻風が奇怪な言葉を終えた瞬間、刻にあった虚脱感が消えうせた。辻風を見るとタバコをくわえて刻を見下ろしていた。辻風は刻が平気だということを確認すると。

「凪裂、すまなかったな」

「え、どういうことですか?」

「お前の触れたこの術式はお前に刻まれた記憶を引き出すためのものだ。だが、おまえにはまだ負荷が大きかったようだな。ふむ、少し計算が狂ったか・・・」

刻は辻風が何を言っているのか分からなかった。術式というもの、刻まれた記憶、それを引き出そうとした辻風、先ほどの辻風の行った行動、そして自分の脳裏に浮かんだビジョン、その全てが分からなかった。

「い、いったい何なんですか今のは!?俺の脳裏に浮かんだものは何なんですか!?、辻風先生がやったことって何なんですか!?術式ってなんですか!?辻風先生は何なんですか!?」

刻が放った声は周りに反響し、部屋を振るわせた。刻の質問を聞

いた辻風は五月蝿そうに両耳を手で塞ぎ、気だるそうに口をあけた。

「お前は五月蝿いやつだな、おまけに質問ばかりする幼子の様なやつのようだな。質問をする時は一つずつ聞いて、それを消化していくべきではないのかな？出席番号１１番凪裂　刻よ・・・」

「・・・・・人の神経を逆撫でするのがお得意のようだなアンタは」

「おや、先生からアンタに格下げかな？酷いものだな、目上の者には敬意を払うようにと習わなかったのかな？」

「そんな事よりも俺の質問に答えてくれ！」

辻風は飽きれた言うような表情を浮かべた後、溜め息を一つついた。再び気だるそうに刻の質問に答え始めた。

「まず一つ、お前が触れた術式はいわゆるゲームやオカルトと呼ばれるようなもので使う儀式のようなものを行う上において必要なものだ。二つ目に私がお前に行ったのはいわゆる『魔法』だ」

「・・・儀式、魔法？」

刻も高校生である、ゲームなど何度もやったことがある。無論その中にはＭＰを消費して使う魔法もあった。だがそれはゲームの中の創造、フィクション、実際にはありえない事なのだ。しかし、辻風は魔法をを使ったというのだ。刻はありえない、何かの錯覚だと考えた。

「ふむ、どうやら信じていないようだな・・・」

「あ、当たりま・・・」

ビュンッ！と何かが自分の顔の横を何かが通り抜けていった。刹那、刻の後ろで小さな爆発が起きた。刻が後ろを向くと床でユラユラと火が燃えていた。さらに先ほど何かが横切った側の頬がちくりと痛み、鼻腔を突く焦げ臭さがあった。辻風の方を再び見るとニヤニヤと刻を見て笑っていた。

「魔法は詠唱しその場で発動させるか、このように魔方陣を紙などに描き携帯することが出来る」

「あ、ありえない・・・」

「ありえない、ねぇ・・・。そんな無粋な言葉を言うものではないぞ。ありえないなどと決め付けてしまえば、人間の探求はそこで止まってしまうものだ」

などと言いながら辻風は右の人差し指を立てると

「降り注ぐ光の星を包む熱き魂よ、その魂を具現し我が指先に灯したまえ」

と先ほどのように詠唱をすると、辻風の立てた指先に小さな火が現れた。その一部始終を見た刻は目を見開いていた。その顔に満足したのか、指を折り曲げ火を握りつぶして消した。

「これで信じてもらえたかな？」

「・・・・・・・・・」

「ふむ、唖然、というか間抜けだな。まあいい、では三つ目だ。私は――――」

と言いながら右手を上に掲げ指を鳴らした。その瞬間辻風を中心として白い風が吹き上がりその姿が見えなくなった。

「なっ！？また魔法か！？」

ビュオオオオォォォォォォッッ！！！

と轟音を挙げ始めた。風は凄まじく強く、足から力を抜いたら壁に叩きつけられそうな程強く、目も開けてられない程で、刻は何とか踏ん張り、耐えていた。

しばらくして風が弱まっていき、ついに風が掻き消えた。風に包まれていた辻風はどうなっているのかという疑問を浮かべながら閉じていた目をゆっくり開けていった。

「つ、辻風？」

風が止み辻風がいた所に辻風はいなかった。辻風はいなかった、が、刻よりやや背の低い少女がいた。少女を見てまず目に付くのはその長く美しい黒髪。長さは腰の辺りまで長く、まるで濡れた鴉の様に深い黒色であった。目は凛としており、眉も整っている。体つきもしっかりしており、胸の膨らみ、体のしなやかさ、どれも美しいというに相応しく、その少女を表すのに『美少女』、『美人』等の言葉以外一切当てはまらない程の美しさであった、服装は先ほどまでいた辻風と同じ服装だが、あきらかにサイズが違った。

「ふふふ、そんなに見つめられると、少々私も恥ずかしいぞ」

あまりの美しさに言葉を失っており、その少女を凝視し続けていた刻は、少しの間を置いてやっと我を取り戻した。

「え、あっ、き、君はいったい・・・」

刻が質問をすると、少女は「フゥッ・・・」と嘆息をついた。

「また君は質問をするのか・・・。まったく呆れてものが言えないよ」

と少女が言った瞬間刻はある仮定を思い浮かべた。刻は恐る恐る彼女にその仮定をぶつけた。

「ま、まさか、つ、辻風なのか・・・？」

「おいおい、先生を呼び捨てにするなよ」

「い、いやどう見たって俺と同い年くらいじゃないか・・・」

「残念だったな、私は今年で５４歳だ」

「えっ！？」

「嘘だ」

と少女が冗談を言い、刻はこんな美少女が三十路や四十を超えた人でなくて安心していた。

「ククク、良かったな、私のような美少女が三十路や四十を超えた中年でなくてお前と同じ１６歳で」

「うっ・・・！」

自分の考えていた事を見透かされ、刻は恥ずかしさを覚えた。また魔法でも使って自分の頭の中でも覗いたのかと思うほどだった。

「な、何で、辻風が、た、確か無精髭の生えた男じゃあ・・・・・・」

「なら下を見てみるか？」

「んなっ、なっ・・・・・・！？」

少女の一言に思わず顔を赤らめた。刻も思春期の高校生であり、こういった類のものにも興味はあったが、顔を少女から離していた。

「ジョーダンだ」

「お、おまっ・・・・・・」

最早刻は少女のおもちゃとされてしまったようである。刻は怪訝な顔を浮かべながら肩を落した。

「いい加減にしてくれ・・・・・・」

完全に少女のペースに持ち込まれてしまい、此処から持ち直すのは無理と考え、先に進ませようとした。

「そうだな、もう飽きたし」

「・・・・・・」

刻はもう黙るしかなかった。

「さて、補足だが私の名前は辻風　紫勇ではなく、本名は虚神（うつろがみ）　実（さね）宵（よい）だ」

「・・・辻風　紫勇じゃないのか？」

「辻風　紫勇は私が静華で働く上での仮名だ。だが確かに辻風　紫勇は存在し、それはこの学校の学園長だ」

「何！？」

確かに今まで学園長の名前を聞いたことはなかったがまさか、自分の授業を担当していた教員の名が学園長の名を借りたものだったとは考えたこともなかった。

「だが何故、この学園で働いているんだ・・・」

「それは単純だ、此処は私にとって有益だからだ。ここで私の本当の名を知っているのは学園長と、お前だけだ」

「だが、何故働けるんだ・・・」

そう、ここは日本、法のある国だ。法によって定められた年齢を迎えなければ働くことは出来ない。

「んっ？それは、まあ、細かいことだ、気にするな」

「いや、ぜんぜん細かくないから！！」

「えぇー、だってー、説明すんのめんどくさいしー」

「いきなりキャラを変えるな！！ていうか、飽きたんじゃなかったのかよ！！！」

「おー、つっこむねぇー。まあ、冗談はこのくらいにしてっと」

「うぉいこら・・・」

と実宵と刻のやり取りが一段らくして、実宵は最後の質問に答えることにした。

「さて、最後の質問に答えてやろう、凪裂・・・、いや、ここは刻と呼ぼうかな、この方が親しみがあっていいな、うん、それがいい」

「・・・・・・好きにしてくれ」

「ああ、そうさせて貰おう」

「早く最後の質問に答えてくれ！！俺が見たあれは何なんだ！！！」

刻が見た謎の光景、雲の地面、その下の移り変わる自分達の社会、そのどれもが普通はありえないことだ。だが、その光景を見たのは刻だけだ、その事に今更気づいた刻はあわてて説明用使用としたが、喋ろうとした瞬間、実宵に手で制され、黙ってしまった。

「離さなくても分かる、さっき説明した、あの術式によって私も見ていた。お前の見ていた光景は――――」

ゴクリッ、一番気になっていたことが語られるということは、とても気になるというものである。しかも、今日の授業のこともある。

「ルシフェルの記憶だ」

「ルシフェルって・・・、確か今日の授業でやった、あの？」

「ああ、そうだ、神に謀反を行い、地獄に堕された天使。その記憶がお前の中にある。」

驚愕だった、まさか今日の授業でやったことがそのまま自分に関係することが起きるとは夢にも思っていなかったからである。

「ルシフェルの記憶がお前の中にあると気がついたのは、今日の授業でだ。あの質問の初めのことは興味のあるものなら誰でも答えられる。だが二つ目の質問で刻、お前はイザヤ書のことと、どこかの国に自分の力を注ぎ込んだ石をばら撒いたといった。この、どこかの国に自分の力を注ぎ込んだ石をばら撒いた、このことは何処の記述にも載っておらず、私などを除いて数少ない聖職者達しか知らないことだ。だがお前は知っていた、何の変哲もないただの一介の高校生であるお前がだ、つまりお前がルシフェルか、その記憶を引き継いでしまっているということ意外無いんだ。お前の見た光景は私も初めて見るものだったが、恐らくあれは天使や神の住む『天界』と呼ばれる所で、あれはルシフェルが反乱を起こす前に見たことのあるものだったのだろう」

「あ、ありえない・・・」

「ありえない、さっきも言ったがそれは間違っている、この私達の生きる世界においてありえないと呼ばれるようなことの数の方がありえないというに相応しいほど少ないのだからな。この魔法だって、結局は有限で、魔力というモノがあるという過程で置けば、全て説明がつく。実際お前のように、天使などの記憶を引き継いだ者は数多く存在している。だがお前は普通ではない、堕天使の中で最も厄介なルシフェルの記憶を持っている。記憶を持っているということは、少なからずルシフェルの力を持っているということだ。お前ははっきり言って、かなり珍しい存在であると共に、危険な存在でもあるんだ」

刻は自分はいったい何なのかが分からなくなっていた。今までは普通の生活をしてきた、これからだってそういう生き方をしていくのだろうと考えていた。しかしもう、もとの生活に戻れる気がしなかった。自分は謀反を起こした堕天使の力と記憶を持っている、それはもう一般人とは言えない。化け物と呼べるのかもしれない。

「確かにお前は危険な存在だが、まだ力の方は覚醒して内容だな。もう一つ、お前に伝えなければならない事がある。それは、ルシフェルがばら撒いた石のことだ。石は数珠のような形をしていて、それを誰かが拾い、不の感情を拾ったものが抱いた時、石の力が解放されてしまい、石ごとの力が所有者に与えられる。石の種類は七種、それぞれ『狂』、『嘘』、『裁』、『召』、『逆』、『操』、『蝕』となっていて、この石の力を持つ者のことを『呪受者』という。この呪受者はルシフェルの記憶を捜し求めている、つまり、お前に向かって来ると言うことだ」

「な、なんで俺なんだ!?何で俺に変な記憶があるんだよ!?」

刻は叫んだ。何故自分なのか、自分でなければならなかったのか、という疑問が刻を襲う。

「それは私にも分からない、だがこれは事実だ。ゲームやおとぎ話なんかじゃないんだ。お前はお前に向かってくる呪受者をどうにかしなければならない。呪受者は不の感情を抱き石の力を解放すると所有者にあなたを殺せば願いを叶えてくれるようになると教える。そして異能を使う変わりに自分の寿命という代償を支払わなければならない。その代償の量は力の大きさによって変わり、失われた寿命は戻らない。だが、ルシフェルの記憶を持つ者を殺すとその記憶が自分に宿り、尽きることの無い寿命を手に入れる。不の感情を開放したものの第一目標は呪受者はお前を殺すことに変わり自然とお前の方に近寄ってくる。お前が何処に逃げようとも奴らは追いかけてくる。同じルシフェルからできたモノだ、自然と引き合ってしまうのだろう。だからお前は戦うしかないんだ」

実宵に未だに信じ切れない現実を前に刻はただただ、呆けることしかできない。さらに、自分が殺されかかっているということを聞かされ、怯えていた。

「信じられるをけが無いんだよ！！！まず根本的に戦いたくない！！俺は普通の人生を生きていきたかったんだ、そんないきなり戦わなければ死ぬなんて言われて納得で切るわけ無いだろう！！！死ぬのなんて嫌だ、俺は普通に生きていられればそれで良かったのに、何でこうなってるんだよ！！！」

「甘えたことばかり言ってんじゃないわよ！！」

パシッ、と平手打ちをし、実宵が今まで使っていた口調とは異なる口調で刻を叱った。

「クッ・・・・・・」

と自分が言ったことと、自分の弱さに恥ずかしさを覚え、刻はその場から駆け出して、研究棟から出て行った。

第五話　事実

研究棟から逃げ出してきた刻は校舎に置いてきてある鞄を取りにいかずに校門を走って出て行った。

夏近くと言っても、もう六時近くであり、七受市は日が早く沈むため、すでに空が赤く染まってきているところであった。

校門を抜けてしばらく走り続け、通学路の途中、普段からよく通る『木のトンネル』の半分を過ぎたあたりで足を止めた。周りに人はおらず、少し離れた所に黒い車が止まっているだけだった。学園から此処までそれなりの距離がある。それをずっと走り続けてきたため、刻の呼吸はかなり乱れていた。乱れた呼吸はすぐに元の速さに戻りつつあり、ただ走ってその場から逃げることだけを考えていた頭が少し冷静になると自分が鞄を持っていないことに気がついた。

「くそ、置いてきたままじゃないか・・・」

鞄は研究棟に行く時に教室に置いてきた。鞄の中には特に貴重品は入れていないため、何か盗まれて困るようなものは無いのだが、一応やらなければならない課題もあるが、このまま家に帰ると明日の朝に鞄を持たずに登校することになってしまい、周りから変な目で見られてしまうだろう。目立つことをあまり好まない刻にとって、どうでもいいという事ではないのだ。

刻は噴出した顔の汗を拭うと先ほど走ってきた道を仕方なく戻り始めた。だが、一瞬躊躇って足を止めた。刻は辻風、いや、正確には辻風　紫勇という名前で本来とは違う姿をしていた、虚神　実宵に自分が最悪の堕天使の記憶を引き継いでいるということを告げら

れ、さらに自分の命まで狙われるという事を言われた。信じられるわけも無いことだが、刻は実際に展開の風景や、彼女の使用した魔法を見た限り、信じるしかないと考えていた。だが、あまりに非日常的過ぎて、信じなければならないであろうことが信じられないのだ。

「何が何なんだよ・・・」

そう呟いた時、制服のポケットに入れておいた携帯がよく聞くような電話の着信音を鳴らし始めた。携帯を取り出して画面を見ると知らない番号からだった。刻は先ほどのこともあり、電話に出る気になれず、切ろうと思ったが、ボタンを押しかけた瞬間に携帯が通話の状態に何故かなってしまった。

「・・・・・・」

一瞬戸惑ったが、仕方なく電話を耳に当てた。

「はい、凪裂ですが、どちら様ですか？」

刻が電話に出ると、スピーカーからはっきりと聞こえて、聞き取りやすい、優しそうな女性の声が聞こえてきた。

『私、舘原学園学園長の秘書をさせて貰っております、山縞（やましま）　犀香（さいか）と申します。凪裂　刻様ですね？』

舘原の学園長秘書と聞き、若干驚いた刻だったが、あれだけの私有地の所有者が秘書の一人もいない訳無いか、とすぐに考え、返事を返した。

「学園長の秘書の方だったんですか・・・。確かにぼくが凪裂ですが、何の御用ですか？」

最早今日何度目の気だるさだろうと、考えるほどの冷静さを取り戻した刻は周りには誰もいないので別にいいだろうと考えその場で山縞と名乗る女性の話を聞いた。

『はい、学園長が刻様とお話をしたいと申しておられまして』

「学園長が？俺に？」

『はい』

いったい学園長が自分に何の用なのか一切分からなかったが、刻は今は誰かと話したくなかった為、学園長と話すのは断ろうと決めた。

「残念ですが、今は誰とも話したくはないんです。しかも、いきなり話をしたいだなんて困ります・・・」

『そうですか、ではまたの機会に・・・。え？・・・・・・・・・・・・はい、かしこまりました。』

山縞は会話を終わらせようとしたが、何かあったらしく一瞬だけ黙ってしまったが、すぐにまた話し始めた。

『刻様、学園長が一つだけ自分の口で伝えたいと申しておりまして、これを聞いてから話をするしないを決めて欲しいとことです。すぐに終わると思いますのでどうか聞いてください』

山縞にそう言われ、すぐに終わるというのでまあいいだろうと思い、山縞に「分かりました」と答えると、『すぐに替わりますので少々お待ちください』と言うと、携帯から保留音が流れたが、ほんの一瞬だけだった。

『凪裂　刻君だね？』

保留音が切れるとすぐに落ち着いた男性の声が聞こえてきた。学園町というのでもっと老人の様な声かと思ったが、予想に反していた。

『ん？どうしたかな？聞こえていないのかな？おーい、聞こえてるなら返事をおくれー』

「え、あ、はい！！」

自分の予想に反していた声に戸惑ってしまい何も言わないでいると、間の抜けたような声で返事を要求されてしまい、予想していたこととの違いがあったことと、急に呼ばれてしまったことで、刻は思わず舌を噛みながら声を裏返してしまった。

『あっはっはっはっは、そんなに驚かないでくれよ。驚かすつもりなんて無かったのに君が変な声を大きく言うから思わず笑っちゃったよ、いやー、ごめんごめん』

「え、あ、はい・・・・・・」

『うん、今度は噛まずに言えたね、よかったよかった、また噛んでたら山縞君に叱られてしまう所だったよ、危ない危ないっと』

刻の学園長に対する第一印象は変わっているだった。

「・・・あの、用件は何なんですか？出来れば早くしていただきたいいんですが」

『ああ、すまないすまない、すぐに話すとしよう。まず知っているとは思うが私は君の通う舘原学園の学園長の『辻風（つじかぜ）　紫勇（しゆう）』だ、名前は知らなかったと思うけどね』

「いえ、知っています・・・。虚神（うつろがみ）から聞きました」

『おお、そういえば虚神君とはもう顔を合わせているのだったね。』

「ええ、まぁ・・・」

此処に来る前にあったことを刻は思い出していた。美少女というに相応しい少女だった。彼女は仮の名前と姿を使って刻達の特殊カリキュラムを担当していたが、今日、刻は正体を見た。

『さて、君に一つだけ言わして欲しい、そしてこれを聞いてから私との談話をするしないを決めて欲しい』

どうせ、ゆすりか何かでもするのだろうと考えていたが、考えを変えるつもりはなかった。

「分かりました」

『うん、じゃあ前置きとしてだけど、落ち着いてきてね・・・』

辻風の声のトーンがさっきとはガラリと変わった。さっきまでの

『お気楽』な感じではなく、本当に重要なことなのだろうと、刻は察した。

まさか、一日に二回もこんな場面に遭うとは考えたこともなかった。いったいどんなことを言われる、この人はいったい何を知っている等のことを考え、絶対に驚かず気にしない用に辻風が何を言うのかを予想を立てていた。

（この人はいったい何を言うつもりなんだ？まさかここで冗談なんて言わないだろうし、何かこの人に知られて、有益な物になりそな物なんて思いつかないし・・・・・）

刻が試行錯誤していると、辻風が息を吸う音が聞こえた。

『君の両親はただの事故で亡くなられた訳じゃない、
呪受者達によって引き起こされた事故によって亡くなられたんだ』

刻の脳に雷が落ちたような衝撃がはしった。刻は自分の両親は唯の事故によって死んでしまったと聞かされていたが、実は両親が事故にあったが、不信な点があったという話をこっそり聞いていた。

そう、刻の両親が事故にあった場所は人通りの余りない田舎道を走っていたところ、崖崩れに巻き込まれてそのまま帰らぬ人となってしまったのだが、崖崩れの崩れたところに何か獣の爪でえぐった様な大きな跡があったのだ。当初は警察も事件かと考えていたらし

いが、その崖崩れはとても大きく、人がこの規模の崖崩れを起こすには爆弾か何かの爆発物が必要であったが、事故の一部始終を見た人がいうにはがけ崩れが起きた時、爆発音は無かったと言う。

「ま、待ってください・・・、百歩譲って学園長の話が本当だとして、何故学園長はそのことを知っているんですか！？」

『私が話すのはここまでだよ。続きが聞きたかったら、私のもとに来て欲しい』

「クッ・・・・！」

刻は歯軋りをした。何があっても驚かないと考えていたが、結局辻風の一言に動揺してしまった。

「・・・そちらに行けば何があったか話して貰えるんですね？」

『勿論だよ。君の質問にも私の答えられる限りなら答えよう』

「・・・・・・分かりました、今から行けばいいんですね」

辻風の処に行けば両親が死んでしまった本当の理由が分かるかもしれないという希望をもち、刻は辻風の処に行くことを決めた。

『いや、君が歩いてくることはない、実はもうすでに車を用意してあるんだ。少し離れたところに黒い車が見えないかい？』

「え・・・・・・、はい、ありますね」

そういえば、自分がここに来たときからあったことを刻は思い出

した。

『そこに私の部下がいる、さっき連絡させたから、すぐにそっちに行くはずだからそれに乗って、こっちに来て欲しいんだ』

辻風の言うとおり、黒い車が刻の方へと近づいて、目の前で止まった。

「乗るだけでいいんですね？」

『そう、君は乗るだけで良いんだ』

刻がドアに触れようとした瞬間、ドアが自動的に人が入れるほど開いた。刻は一瞬訝しげな顔をしたが、何もなかったかのように車に乗った。

『では、こっちで待っているよ』

辻風がそう言うと直ぐに通話が切られた。ドアは開いた時と同じように自動で閉まった。

車の中には女性と男性がいた。男性は運転席に、女性は後部座席にいた。男性はドアが閉まったのを確認すると、車を発進させた。

運転をする男性はイヤホンマイクを付けており、服装は夏にも拘らず黒いスーツをしっかりと着ており、刻の隣に座る女性は男性とは対照的に、薄手のシャツと白を基調としたスカートを履いた女性だった。

女性は資料を手に持ち数枚ほどめくっていき、途中何度か刻の方

を横目で見ていた。資料をめくるのを止めた女性は刻の方を向くと、小さくお辞儀した。

「初めまして、私、学園長のボディーガード兼舘原学園図書委員長をさせて頂いている、『栞紙（しおりがみ）　四葉（よつば）』と申します。以後お見知り置きを」

「え！？が、学生だったんですか？」

「はい、学年は刻様より一つ上なんです。刻様は一つ下ですので余り見たことはないと思いますけど」

事実、刻は四葉を見かけた記憶がなかった。というよりも、スーツを着た四葉は社会人ですと言えば信じてしまうほど大人びていた。綺麗で艶のあるロングヘアーで、鼻梁も高く、目は若干下がり気味で、とても優しそうな印象を抱かせる。そんな女性が自分の横に居るとなると刻も高校生である、先ほどから脈が速まって、緊張状態に陥っており、顔も赤くなっているのではない方いうくらい熱さを感じていた。そんな刻の姿を見て、四葉は首を一瞬傾げたが、直ぐに察したらしくクスリと笑っていた。

「フフッ」

そんな矢先、運転をしている男性が口をあけた。

「・・・・栞紙、もう直ぐ着く、無駄話は止めておけ」

男の声は何処かぎこちなかった。

「別に無駄話なんてしていませんよ、明途さん。それより、自己紹

介しないあなたの方が失礼では御座いませんか？」

明途と呼ばれた運転手は、黙り込んでしまったが、直ぐに口を開いた。

「佐々奴　明途だ・・・・・・。・・・・・・・・・・よろしく」

「は、はい、此方こそ・・・」

最後のほうの言葉は、仕方なく付けた様な気もしたが、四葉が微笑みながら頷いていたので刻は気にしないことにした。

そして、先ほど明途の言った通り、舘原学園の門が見えてきた。因みに舘原学園で車が入るのは正門で、刻としては入学式以来入ったことが無かったので、まるで始めて入るかの様な気分でいた。

校門の守衛は門ごとに二人以上常におり、正門の二人は車を見ると脇により、軽く会釈して車を通らせた。正門を抜けると目の前に坂がありそこに階段が設けられている。車は階段の左右にある緩やかなカーブを描いた車道を下っていく。坂を下りきると二つの車道が一つになり、学園本部に向かって伸びる道路にのって進んでいった。

そして本部前に車が止まると四葉がわのドアがやはり勝手に開き、四葉が降りた後、刻も降りた。

「学園長がお部屋でお待ちです。学園長室は本部最上階、五階にあります、ご案内いたしますわ」

明途も降りるのかと思ったが、刻が降りると直ぐにドアが閉まり、

車は何処かへ行ってしまった。

「さあ、参りましょうか」

「・・・はい」

四葉に促され、刻は四葉の後について行った。

第六話　日常からの逸脱

四葉に連れられ、数歩後ろを歩く刻は始めて見る学園本部を物珍しげ、と言っても特に珍しいものは無く、入り口から右に自販機と資料室と書かれた扉があり、左側には待合所の様なところと受付程度、そしてまっすぐ行くとエレベーターが2機と非常用階段しかなかった。

四葉と刻はエレベーター前で立ち止まり、四葉は上向きの矢印の描かれたボタンに触れ、しばらくするとデパートなどで聞くような音が鳴り、目の前のドアが開いた。

「お乗り下さい」

四葉に促された刻がエレベータへ乗った後に四葉も乗ると、5階を押すと押した瞬間にドアが閉まった。

しばらくの間エレベーターに乗り、目的の階につくとエレベーター独特の感覚が刻を襲い、少しふら付いた。

学園長室のある五階は静まり返っており、音を立てること自体がタブーの様な感じがした。周りは薄暗く、明り取り用の窓は無い。学園長室はエレベーターを降りて直ぐ向かいにあった。

四葉が歩き始めたので刻もそれについて行く。

大きな黒く塗られた扉の前で止まった。

「此方の部屋に学園長がいらっしゃいます」

ゴクリ、思わず唾を飲み込んだ刻は自分が緊張をしていることに気がついた。

そして、四葉が扉に手をかけ、ゆっくりと音を立てない様にやってるかのごとく静かに扉を開けた。

扉が開かれていくと、部屋から光が溢れた。刻は眩しさで顔をしかめたが、光にも直ぐになれた。四葉が先に中へ入って行き、刻も後に続く。部屋の中を見ると床にはカーペットが敷かれ、両側の壁には本棚があり、本がびっしりと入っており、天井には豪奢なシャンデリアの様なものもあった。そして部屋の奥の真ん中には学園長の机があった。しかし学園長は回転式の椅子に座りこちらに背を向けており、わずかに頭と手が見えるだけだった。

「学園長、凪裂　刻様をお連れしました」

それを聞いた学園長は椅子から立ち上がったが背を向けたままだった。

「ご苦労様、栞紙君。下がっていて良いよ」

学園長――――辻風（つじかぜ）　紫勇（しゆう）は電話の時と同じような声で言った。

「はい。失礼します」

四葉が部屋に入って来た時と同じように扉の音を立てずに出て行くと、刻は一人取り残されてしまった。

「よく来たね、刻君」

辻風はそう言うとこちらにゆっくりと顔を向けた。

「あなたが、学園長先生・・・・・・」

辻風　紫勇は背の高い男性で、１８０はゆうに超える身長だった。髪の毛は短く、顔も整っており、髭があごのあたりに少し生えていた。若干威圧的な視線を送ってくるが、刻は電話での会話から考える限り、とても怖い人の様には思えなかった。

「学園長先生だなんて、堅苦しい名称は許してくれよ。辻風とでも呼んでくれないかな？」

「は、はい。学・・・・・、辻風、さん。凪裂　刻です。・・・はじめまして」

刻の想像通りその手の人の様な人ではなかった。むしろとても優しそうな人である。

「うん、それでよし」

辻風は満足そうに頷くと、何処かで見たように右手で指を鳴らすと、刻の足元のカーペットに幾何学模様が浮かび上がった。

「・・・これは、魔法！？」

今日の放課後、宗教学研究棟で見たものと同様に青色に発光し始め、カーペット上に少し装飾の施された椅子が具現されていき、完全に椅子が具現されると発光も収まった。

「驚いたかな？」

「は、はい・・・。辻風さんも魔法使いなんですか？」

魔法―――実宵はその場で詠唱を行い発動させるか、魔方陣と呼ばれる模様を何かに描いて携帯し、詠唱無しで発動させることが出来る。辻風の使用したのは後者である。

「いや、私は魔法使いや、魔術師の類じゃない。でも、虚神君に頼んでいろんな種類の魔方陣がこの部屋の至る所に施してあってね、ついでに言うと君の通った道にもたくさんあったんだよ。」

辻風の言葉を聴いて帰りに魔方陣だらけの道を戻ることになるのかと思うと、とても不快な気分に刻はなった。

「基本的には詠唱しないと魔法は使えないけど、魔方陣さえあれば一応誰でも使えるんだよ。無論、君にもね。おっと、無骨な椅子だけど、せっかく出したんだから座って、座って」

辻風の説明が終わると思い出したかのように魔方陣によって作られた椅子に座るように促し、刻が座ると辻風も自分の椅子に座った。

「では刻君、ここに来たという事は真実を知りたいんだね？」

「・・・・・・はい」

刻が肯定の意を唱えると、辻風は脚の上に肘を乗せて手を組み顔を近づけた。

「分かった。では、私の知る限りの事を君に話そう」

そして、辻風は刻に話し始めた。

「私は、君のお父さんとは長い付き合いでね。彼と私は大学で知り合ったんだが、昔の彼との出会いは面白くてね。フフッ、彼は私の大学の後輩だったんだけど、私がある研究室を訪ねると、その部屋の中に床が見えないくらいの書類あったんだ。それに埋もれて寝ている人がいてね、それが君のお父さん勇君(いさみ)だったんだ」

自分の父、『凪裂(なぎさき)　勇(いさみ)』と辻風の出会いのことなど本来ならばどうでもいいことで、早く事故の真相を知りたかったのだが、刻の中で真面目でしっかりとしていて、失敗やだらしない行動など見たことが無かった刻にとって予想外の父の若き頃の話に意識はそちらにしか向いていなかった。

「勇君は研究に夢中になりすぎて三日三晩ずっと研究室にこもっていて、疲れ果てて寝てしまっているところを偶然私が見つけたんだ」

（父さん、昔から研究熱心だったんだ・・・）

刻の父、勇は生物学の研究をしていた。生物学の業界ではとても有名だということを物心ついたころから知っていた。

刻の家で勇は、今は使われていない2階の書斎で毎日のようにこもっており、刻の母が呼びに行かなければ食事にも降りてこなかった。

「私が勇君を起こそうとしたところに、君のお母さん、狭霧(さぎり)　深刈(みかり)さんがやってきてね、勇君を叩き起こして私に迷惑をかけたと思ったのか、彼の頭を鷲掴みにして二人そろって頭を下げてきてね、私も面食らったよ」

刻の母、狭霧　深刈は勇と幼馴染で、幼・小・中と同じ学校に通っていたらしいが、高校で分かれてしまったが大学で再開し、刻はなんやかんやあって付き合うことになったと聞いており、そのなんやかんやの部分を何回も聞こうとしたが、教えてもらえなかったという。

「その後、特に私が何もしていないことを言うと深刈さんは慌て始めてしまってね、今でも思い出すだけで笑ってしまうよ。まあ、その後勇君と私が同じ学部であることが分かってね、そこから彼と知り合いになってね、君のお父さんに何度も深刈さんとの惚気話を聞かされたものだよ・・・」

「なんかすいません・・・、うちの親が・・・」

事実、勇は毎日のように書斎にこもっていたとしても深刈のことは大切に扱っており、深刈の作る創作料理が失敗していようと絶対に笑顔を崩さず美味しいと言って食べていた。

「いや、私も聞いていて面白かったよ。まあ、何回か同じ話があったけどね」

刻は自分の親がここまで恥ずかしいことをしていたのかと思うと顔から火が出るほどだった。

「さて、前置きはこれ位にして、話を進めるとしよう。あの事故には不可思議なところがあった、ということは知っていると思う」

刻は頷いた。

「突然起きた崖崩れに勇君と深刈さんの乗った車が巻き込まれた事故、警察のほうではこういう風に済まされてしまっているが、崖崩れの起きた場所には何かで抉り取られたような跡があった、これは知っていたかな？」

「はい」

「わかった。私は勇君たちが亡くなったと聞いて直ぐに、事故現場に訪れたんだ。私はその頃から呪受者や天使の存在を知っていてね、それらを追うために私は呪受者達の出す魔力やマナと呼ばれているものの名残を感知する方法を得とくしていてね、私はもしやと考えて調べてみると予想通り名残があった」

「つまり・・・・・・、呪受者か何かが父さん達を殺したって事ですか・・・」

今までどうやったら、事故ではなく勇達を殺したのかを考えていたが、自分を狙う者達だと分かった瞬間、内に秘めた感情が漏れ出していき、両親を殺した憎しみと自ら此方に来てくれるという好都合なことから来る喜びが出てきていた。

「おそらくそのはずだ。そして君を殺そうとやってくる呪受者だけれど、君は記憶を手に入れただけであって、力を手に入れたわけではないから彼らにとって格好の獲物だろうね」

力を手に入れたわけではない、格好の獲物と辻風に言われ、先ほどの感情は直ぐに霞んでいった。

「確実とは言えないけど、いずれは力のほうも手に入れると思うけど、まだ君は無力だ。友人の息子をみすみす殺させるわけにはいか

ないからね、刻君には護衛をつけるとしよう」

再び辻風に言われた現実に自分の無力感を刻は覚えた。

「君の護衛は誰が良いかな・・・。うーん、そうだ！虚神君にしよう、うん、それがいい」

無力感から、何も聞こえていなかった刻だったが、護衛の話は聞こうとなんとなく聞いていたが、虚神の名が聞こえた瞬間、耳を疑った。

「え！？護衛の話は分かりますけど、なんであいつなんですか！？」

「ん？いや、虚神君はその手の道のエキスパートと言って間違いないからね、しかも博識だし、私の知識なんかよりもずっと上だよ」

「いえ、だとしても、」

「ぐだぐだ五月蝿い奴は嫌いだぞ私は」

ビクッ、っと音が鳴りそうなほどびっくりした刻の目の前に話題の張本人である虚神　実宵が「辻風　紫勇」としてではなくいきなり現れた。実宵は刻に息がかかるほど顔を近づけてきた。

「うおっ！！な、なんでいきなり！？」

「おや、相変わらず行動が早いねぇ」

「ずっと、見ていましたから」

「どうやって見ていたんだよ・・・」

「無論、魔方陣を使ってだ、ここに移動するのにも使った」

「万能なんだな、魔法ってのは・・・」

刻がボソッと呟いたが、それを聞き逃さなかった実宵は、

「いや、魔法は万能ではないぞ」

「そうなのか？」

「まあ、まあ、その話は後にするとしようか。虚神君、話は聞いていたと思うけど、刻君の護衛と彼を鍛え上げてくれないかな？」

刻は内心でちょっと待てと異議を唱えようとしたが、実宵が答えるのが早く、

「分かりました」

「ちょ、まっ・・・・・・！！！」

再び異議を唱えようとしたが、思い空しく実宵に首に打撃を入れられ、パタリと倒れてしまったが辻風と実宵は気にせず話を続けた。

「うん、ありがとう」

「紫勇さん、刻を鍛えるために私も彼と同じ場所にいる時間が長いほうが良いと思うので、彼の家に住み込みをしたいのですが、よろしいかしら？」

（ん？今なんか、とんでもない話が進んでないか？）

薄れゆく意識の中で刻は話を聞いていた。

「う～ん、教育者として余すすめられないけど、まあ、良いと思うよ」

「あざーす」

「軽いなぁ、おい！！」

刻が絶叫すると、おや、と言った具合に実宵は目を見開いた。

「また計算が狂ったな。刻相手だと計算が狂ってしまうな、これは鍛えるついでに研究もしなければならないな」

不気味な笑みを浮かべ、クククッ、と笑い声を上げた後、辻風のほうを向き

「それでは、私は準備をしますのでこれで失礼します」

「うん、じゃあね～」

軽い感じで手を振っていると実宵は床を履いていた靴で叩くと魔方陣が発行し始めた。

「じゃあね刻、また後でね」

茶化したように言った後、実宵は消えた。

「さて、虚神君も行ってしまった事だし、最後に一つ。分かっているとは思うけど、このことは誰にも言っちゃだめだよ？もし誰かに知られてしまったら、私も隠蔽が大変でね、結構大変なんだよ、掃除って」

その一言によって、自分が考えていた辻風像はまったく違っており、見た目通りだったのではないかと思う羽目になった。

過去　　異形の者―奴隷の具現―

今ではない数年前のことである。

髪の長い男は石を拾った。見た目は数珠のように繋がった石であった。

顔に傷を持つ男は石を拾った。見た目は下流の川の石ころのような石であった。

女は石を拾った。見た目はダイアモンドのような形の小さな石であった

ベッドで横たわっていた者は石を貰った。見た目は獣の牙のような石であった。

血まみれの男は石を持っていた。黒く光る黒曜石のようであった。

男は石を持っていなかった。右手の甲に紅く輝く石が埋まっていた。

最後にフードを被った者は石を拾った。見た目は石というよりは指輪のような石であった。

この七人は石がすべての石が所有されたとき、同時に脳裏に声が響いた。

『汝、願いはあるか。汝の欲望、夢、復讐、死者の生還、汝らの如何なる願いでも叶えよう。』

声は優しくもあり、怖くもあり、恐ろしくもあり、弱弱しくもあり、強くもあり、いかれており、神々しく、狂っているかのようにも聞こえた。

『ただし、条件がある。汝らは無意識のうちにある者の近くまで行く。汝らは自分の本能で判断し、彼のものを殺す、それだけの遊戯だ。』

声は言った

『しかし、彼は普通では殺せない。したがって、遊戯の開始時に各々に力を与えよう。使役方法は与えられると同時に手足を使うような感覚で使えるようになる。…では、遊戯を開始する』

瞬間、七人、各々に力が与えられ、声の言う『遊戯』が始まった。

…それから数か月後、ある曇りの日、人通りの少ない田舎道で崖崩れが起き、車がそれに驚きハンドルを切り間違い、ガードレールにぶつかった。

その一部始終を見ている男がいた。

ただの男ではない。男の腕は巨大に膨れ上がっており、獣の足、というよりも化け物の腕の様な筋肉隆起しており、指も同様で、指先にはあらゆるものを抉り取るような爪が生えており、そこには泥がこびり付いていた。

男の腕が一瞬にして人間の腕に戻ったが、男の両足が獣の足に変

わった。男は足を曲げ、力を込めて車の下に跳んだ。普通の人間であるなら確実に死ぬような高さから跳んだが、男は常人ではない。呪受者だ。男は両腕を翼に変え、静かに地面に降り立った。

男は翼を再び化け物の腕に変え、崖崩れで落ちてきた巨大な岩を軽々と持ち上げて、車を叩き潰した。
車からは乗っていた者の血と混じったガソリンが漏れていた、しばらくすれば引火して爆発するかもしれない。

男がその場を離れようと車に背を向け、歩き始めると男に水滴が当たった。曇り空が遂に均衡を崩し、雨が降り始め、すぐにどしゃ降りになった。

男は自分の右手を見るとすでに元の状態に戻っており、泥と鮮血が雨で混ざり合いながら腕を下って行った。

男は高らかに笑い、勝利を手にしたかのようだった。

その男の首には紐で下げられた黒曜石があった。

第七話　居候

辻風(つじかぜ)が自分には話せることはもうないと言うと、刻(きざみ)の後ろの扉を開けて女性が入ってきた。辻風は手招きをしてその女性を呼んだ。

「刻君、君に紹介しておこう、私の第一秘書の山縞(やましま)　犀華(さいか)君だ、電話越しにだけど話したよね」

「改めましてですが、山縞です。以後、お見知りおきを」

そういうと、山縞は手を体の前で揃えて刻に頭(こうべ)を垂れたので、刻も慌てて頭を下げた。

「こ、此方こそ、よろしくお願いします」

山縞は二十代後半あたりの女性で、秘書と言うに相応しい見た目で、銀縁のめがね、手には書類入れ、髪を後ろでまとめており、黒いスカートと同色のジャケットをきっちりと着こなしていた。

「さてと、もう遅くなってしまってから、家に送らせるよ」

「いえ、大丈夫ですよ、いつも通っている道ですから」

辻風は少し呆れた顔をした。

「刻君、君は私の話を聞いてなかったのかい？君は命を狙われているんだよ？さすがの私でも呆れたというしかないよ・・・」

刻は自分が命を狙われていることを完全に忘れていた。

呪受者と呼ばれる、堕天使ルシフェルの力の欠片である魔の石を持つ者たちに刻は命を狙われている。一人で暗い夜道を歩いていれば、辻風が呆れるように格好の獲物であることは明白であると言われたばかり。そんな単純かつ、自分の命がかかわる重要なことを忘れていたことに刻は恥ずかしさを覚えた。

「君は今現在一人で歩くことは自殺に等しい事だと考えて欲しいんだ」

「・・・・・すみません、自分の命が狙われるなんて思ってもみなかったものですから」

「確かに急なことだからね、慣れないのは仕方がないね。けど、慣れてもらわないと困る、私は知り合いをこれ以上殺されてほしくないからね」

――――――この人は本当に父さんと仲がよかったんだろうな・・・・・。

刻がそう思っていると。突然携帯のバイブレーションが鳴り、山縞が「失礼します」と言って、後ろを向いて携帯に出た。

「どうしたんです？・・・・・・、そうですか、わかりました」

山縞が通話をやめて、刻と辻風の方を向くと、

「学園長、虚神様が準備が終わったので此方に・・・・・・」

山縞が言いかけたところでカーペットの模様が一瞬輝き、いきな

り実宵が現れたので山縞は「・・・いらっしゃいました」と続けた。

「私がついているのだ、そう簡単に殺させやしないさ」

頼り強い一言ではあったが、刻は先刻、実宵に会ってぶたれたばかりであり、刻としては気まずいのである。

「それは心強いね。さっきも言った通り、実宵君に任せるとしよう」

辻風が言い終わると実宵は刻の方を向いた。

「さてと、お前の家には、というか、もうこの辺で飛んで行けないところはないから、とっととお前の家に飛ぶぞ。ほら」

と言って、刻に向かって手を伸ばした。

「飛ぶ？」

実宵の「飛ぶ」という言葉に疑問を覚え、難しい顔をしていると実宵はそれを察し、出した手を下ろしてこの魔法の説明を始めた。

「ん？ああ、お前は知らなかったな。さっき私がここに来たときに使用した魔方陣を使った魔法の事で、私はこの七受市一帯に陣を描いてあるからこの辺りでいけない所は無いというわけだ」

この魔法「転移魔法」という種の魔法で、魔方陣を使うため刻にも使用は可能だ。だが、この魔法は自分のいる場所と移動したい場所に魔方陣が描かれていないと使用はできず、描いたとしても魔方陣を一部でも消されてしまうと使用ができなくなってしまうが、危険性は特にない。因みに、これを使う場合使用者に触れている者も

一緒に連れて行くことができる。

「分かったか？」

「まあ、一応は・・・」

と言いつつも余り分かってはおらず、原理が分からない以上魔法で飛んでいくのは気乗りはしなかった。

「なら早くいくぞ」

といって、下ろした手をもう一度差し出し、刻は出された実宵の手をじっと見ており、女性の手を握ったことのなかった刻(チキン)はドキドキしていた。

「ほら、早く行くぞ」

そう言うと実宵は刻がなかなか握らないため、若干の苛立ちを覚え無理やり刻の手を掴んだ。

「ちょ・・・」

いきなり自分の手をつかまれ、驚いた刻が実宵に何かを言おうとしたが実宵が口を無理やりふさいで発言を止めさせた。

「それじゃ、私たちはこれで」

「うん、じゃあね刻君、虚神君。また明日」

友達に伝えるかのように辻風が言い、実宵が指をパチリと鳴らす

と刻の目の前が一瞬輝き、思わず目を閉じた。

輝きが終わり、目を開けてみると目の前は既に辻風のいた部屋ではなく、見慣れた屋根、玄関の扉、そして刻の性である「凪裂」と掘られた表札、刻の家の前であった。

実宵は刻の手を握ったまま歩きだしたので刻もつられて歩き始め、家に向かっていき、ドアのノブを握ると、鍵がかかっていたにも拘らず、ドアが開いて刻の家の玄関が見えた。

「ふむ、悪くない」

「人の家を勝手に品定めするな」

「褒めたんだぞ？」

「そいつはどーも」

軽口をたたいた後、玄関で靴を脱ぐと右側に二階へ上がる階段、居間へ続く廊下の左側に和室への戸、階段の奥にクローゼットがある。廊下を渡り居間へのドアを開け部屋を一瞥すると再び、

「ふむ、悪くない」

「・・・それはどーも」

実宵はキッチンを見て、家具を見て、一度廊下に出てトイレを見て、

「ふむ、わる・・・」

「やかましい！！」

スパ――――――ン！！！！！

居間に乾いた音が響き渡り、刻の手には筒状に丸められた情報誌が握られており、先ほどの音はそれと実宵の頭によって発せられたものだ。

「っつぅ・・・、貴様、何をする！！！痛いではないか！！！」

「やかましい！！！」

刻はもう一度『情報誌ソード（刻命名）』で切り（叩き）かかったが、実宵がポケットから紙を取出し、指で素早く一度擦ると刻の攻撃は止められてしまった。

「なに！？」

刻が一瞬動きを止めると、実宵は後ろに跳ねて距離を取った。

「ふんっ、甘いわ。そんなんでは殺されるぞ」

「・・・殺されてたまるか、でも、お前が守ってくれるんだろ？」

実宵が刻を護衛する。それは辻風が先ほど実宵に命じたことだ。しかし、実宵は意外な一言を刻に放った。

「いや、私はお前を守る気はないぞ？」

「は？」

――――――え？守ってもらんじゃないのか？いや、辻風さんが命じたんだし・・・・

「私はお前を守る気は無いといったんだ。だが、守る気は無いと言ってもお前が一人で戦えるようになれるまで鍛えてからだがな」

――――――鍛える？誰を？もしかして俺を？

「あたりまえだ」

「うお！！」

「ほんとにお前は分かりやすい奴だな・・・、というか、辻風さんも言ってただろ」

自分の考えることがまたもばれてしまい、これからをあまり顔に出さない練習でもしようかと考えていたが、刻は実宵は読心術の魔法か何かを使ったのではないかと考え、結局このトレーニングをやることはなかった。さらには、また言われたことを忘れてしまっていた。

「まあ、単純な奴は嫌いではないがな」

「・・・・・単純で悪かったな」

「フッ、まあいいさ。ついでにお前を鍛えるといっても単純なことだがな」

そういうと実宵は朝には何も無かったはずのテーブルの横にいつの間にかあったボストンバックからいくつかを取り出してテーブルの上に並べた。

「これは？」

「今からお前に教えるための教材のようなものだ」

刻はテーブルの上の物を見るとビンが４個あり、それぞれ黒炭、謎の液体、様々な色の草花、黒、銀、褐色色の金属などの物が入っていた。ほかには和紙や羊皮紙といった数種類の小さな紙があった。

「では、これから授業を始める、そこの椅子に座れ」

「はい？」

実宵の言った授業という言葉に刻は惚けた声をあげた。

「・・・鍛えてくれるんじゃないのか？」

「ああ、鍛えるぞ、だから早く座れ」

「いや、答えにねぇよ」

「はあ、めんどくさいな」

「ちゃんと教えろよダメ教師」

しかし実宵は口を尖らせて、

「だって私教師じゃないし」
「今日授業をやったばっかだろ！！」
「だって私もう静華の教師じゃないし」
「はい！？」
再び惚けた声を上げると、実宵を追求した。
「どうしてだ？」
「私は一時的ではあるがお前を護衛をするという時点で常にお前の近くにいなければならない。だから教師である私、『辻風　紫勇』だと常にお前の近くにはいられない。だから教師の立場ではいられず、しかたなく、金稼ぎを止めることにしたんだ」
「なんか今、公務員を侮辱しなかったか？」
「というわけで、私はいつでもお前を守るために学校のどこかにいることにしたんだ」
自分の指摘を無視されたことはともかくとして、実宵の言うことは分かった。
「なんかすまないな、俺のせいで」
「気にするな、金稼ぎぐらいいくらでもできる」
実宵の余裕な態度に若干な苛立ちを覚えたが、実宵に何か言った

ところで意味はないと考え、何も言わなかった。刻は人間とは学習する生き物であるということを改めて認知し、自分の寛大な心に花丸をあげた。

「ま、こんなことはどうでもいいから、さっさと始めるぞ」

――――――実宵のこのような態度には慣れてきた、とっとと座るか・・・

「はいはい」

「先生に対してその態度はなんだ！！」

「結局俺に対しては教師なんじゃねえか！！！！」

第八話　糸使い

実宵から自分の存在、両親の事故の仮定、そして実宵の授業、そんな今までの人生とはかけ離れた世界に踏み込んでから一日がたった。

昨夜、いきなり始まった魔法の講義は刻に対する茶化しが多く、夜遅くまで続いてしまい、刻の目の下には黒いマーカーで描いたかの様な黒い隈が二つあった。

眠い目をこすりながら欠伸をし、昨日、いつの間にか置かれていた実宵のボストンバックの中にあった刻の鞄を床に置いた。

「それじゃあ学校に行くけど、お前はどうするんだ？」

刻は玄関で靴を履いて自分の家の新しい住人（いそうろう）に向けて言った。

「気にするな、私は陰からお前を見守っているさ。私と一緒にいられないからって悲しむなよ？」

「誰が悲しむもんか！少しでも変な世界を見れないと思うと気が楽だよ」

若干の照れ隠しのような悪態をついてから、玄関のドアを開けた。

「それじゃあな」

「ああ、行って来い」

ガタン、とドアが閉まる音を聞いた後、鍵を閉めてから実宵は自分の仮住まいの居前へ向かった。

「さて、私も準備をするか」

腰に手を当て、その眼下には実宵の持ってきたボストンバックの中を見て、不敵な笑みを浮かべていた。

#　　#　　#

刻は夜遅くまで起きていたため、なかなか寝ることが出来なかった為、普段より早く家から出た。

普段通る道にはあまり人影がなく、車も余り走っていなかった。

昨日と同じく、いつも通りの道のりを歩いていき、木のトンネル――――正式名称・冷野坂、を歩いていると、刻は昨日のことが思い出されてきた。

――――――――――たしか中腹あたりで電話がかかってきて・・・、そう、この辺だ・・・

昨日の自分が立っていた場所を見下ろすが、無論あるのは舗装された道のみで、他には塵位しかない。虫も歩いていない。蝉もまだ鳴いていない、涼しいからだろうか。

――――――――――電話を貰ったあとに栞紙先輩と会ったんだっけな

刻の補足をするならば、栞紙達、であり、刻の思考は若干四葉の方へ傾いていた。

――――――――――栞紙先輩、綺麗だったな・・・

そんなことを考えていると、なんだか自分が恋する少年みたいに思え、恥ずかしくなって、首を横に激しく振った。

――――――――――な、なんかがマズい、他のことを考えよう・・・

「なんか、普段と通る道とは違うみたいだなぁ」

「そうですか？いつもこんな感じですよ？」

「うぉう！？」

他のことを考えようとして、完全に吐露してしまったのことと突然後ろから声をかけられたことに加え、たった、二秒前に考えていた当の本人に声をかけられたことで、思わず跳び上がってしまった。

早くなった心臓の鼓動と呼吸をしながら後ろを振り返るとそこには昨日会った静華高校図書委員長の四葉がいた。

昨日とは違い、今は登校中のため制服である。舘原の制服は学年ごとにシンボルカラーが決まっており、高一の刻の色は赤、刻より

一つ年上の四葉は緑色で、首回りと袖の折り返し部分がそれぞれ彩られている。初等部と中等部にもシンボルカラーがあり、学年が上がるごとに色が変わるのではなく、学年と共に色も一緒に上がるのである。一方で大学には制服はなく私服での登校のためシンボルカラーは無い。

「おはようございます、刻君」

「お、おはようございます、栞紙先輩・・・。いきなり驚かさないでくださいよ・・」

「フフフッ、ごめんなさい、軽い冗談ですよ。驚かせるつもりは若干ありましたけど・・・」

「え！？」

「半分冗談です」

「余計厄介ですよ！！」

「そこが冗談です」

四葉は自分の予想以上の刻の反応を見てクスクスと再び笑い始めた。その顔を見た刻は燻った感情が、完全に水をかけられた様に消えるのが分かり、げんなりとした。

「酷いですよ、栞紙先輩・・・・・・」

「フフフッ、刻君をからかうのって楽しいわね、癖になっちゃいそう」

「勘弁してくださいよ・・・」

なぜ自分の前にに現れた新しい女性陣の内3分の2が自分をからかうのかが、刻には分からなかった。刻としては、自分などからかったところで特に面白いとは思えなかったが、新規参入者にはそんなことはお構いなしだった。

「ねぇ、刻君」

「何ですか、栞紙先輩？」

刻が尋ねると、四葉はため息をついた。

「ど、どうしたんですか！？」

「私、栞紙って呼ばれるの好きじゃないのよね・・・、だから四葉って呼んでくれないかな？」

「うぇ！？で、でも・・・」

急に会って間もない年上の女性から自分のことを名前で呼ばされるという事態に刻の思考回路はパンクを起こしかけており、顔も茹でた蛸の様で、まともに四葉の顔を見れずにいた。

「えっと、よ、四葉さん、で、いいですか？」

「ええ、いいわよ。うん、ありがとう！」

そう言って、刻に向けて満面の笑みを浮かべたが、それは刻にと

って、ある意味止めでもあった。刻は初心で繊細であった。友人関係の那実や磨輝とは刻にとって扱いが違うのである。

刻の許容量を超えた頭はショートしたと言っていいくらい、熱くなり、同時に思考が止まり、刻は歩くだけの人形となった。

「あ、そうだ！刻君、放課後に学園の本部前に来てくれないかな？」

刻の頭は完全に働いていなかった状態だったが、四葉の声は刻の思考を呼び戻すのに最適であり、すぐに脳は再起動を果たした。

「何かするんですか？」

「それは来てからの秘密・・・」

人差し指で口元を抑え、小悪魔めいた笑みを浮かべた。

「そ、そうですか・・・」

刻はドギマギしながら答え、四葉の頼みを承諾した。

「ありがとう！あ、じゃあ、あたしは図書館に用があるからじゃあね！」

「え・・・、あ、ホントだ、いつの間にか校門抜けて校舎の方に来てたんだ。・・・気づかなかった」

途中、刻の思考回路が止まっていたため、冷野坂を上り切り、校門を抜けて歩いていた記憶は無い。四葉が切り出さなかったら自分はどこまでも歩いていたかもしれないと刻は思った。

――――――――――ホント、下手したら、壁に向かって歩き続けてたかも

#　　#　　#

靴を履きかえた刻は自分の教室へ行くと、まだ誰もいないことが分かった。誰かがいれば話そうと考えていたが、それはできないため、仕方がなく自分の席に座って誰かが来るまで、待つことにした。

――――――――――ここで変な声、ていうか俺の記憶なんだけど・・・、まあ、聞こえた、もとい頭に響いたんだよな。・・・・・・・・・・・・・・暇だな。

暇だと考えていると、刻に不意に眠気が襲ってきた。刻は眠気に抗えず、腕に頭を沈めて、眠りに落ちた。

#　　#　　#

眠りに落ちた刻を見ている人影が一つあった。

人影は深い眠りについた刻に近づくと、から透明で細い糸がだらりとたれ、腕を交叉すると蜘蛛が糸を吐くかのように部屋中に糸が張り巡らされた。

人影は刻の首に糸をかけ、首を・・・

「貴様、そこで何をしている」

人影が後ろを振り返ると、閉めたはずの教室の扉が開かれ、扉の側面に実宵が寄りかかっていた。

実宵は扉に寄りかかるのを止め、後ろ手で扉を閉め、鍵をかけた。実宵から見て人影の顔は見ええない。しかし、服装だけは見ることはでき、この学校の制服であることが確認できた。

教室は薄暗く、およそ相手側からも此方を見ることはできないだろうと実宵は考え、人影の方に行こうとしたが、その瞬間、実宵の頬を何かが切り、実宵の白い頬に紅い線が伝った。横目で見ると、先ほど張り巡らされた見えない糸であった。実宵の頬を切りつけた糸は血がつたり、一部分だけ宙に紅い線が浮かんでいるかのように見えた。

「なるほど、こいつか。邪魔な糸屑だ」

実宵が自分の血が付いた場所に指を置くとそこが高熱を持ち、一瞬にして全ての糸に熱が伝わり、焼き尽くし、教室に焦げた臭いが立ち込めた。

「さて、これで邪魔な糸屑は無くなったな。貴様、呪受者だな・・・」

「・・・・・・」

糸使いは何も喋らず、後ずさりとする、実宵に向かって何処からか出した糸を放った。糸は実宵の視界を埋め尽くした。しかし実宵

は冷静に、かつ素早く胸元のポケットから魔法陣の描かれた紙を取出し、自分を守るための石の壁を作り出して糸を防いだ。

しかし、相手は再び糸を張り巡らせた。

「懲りずに同じことをす、・・・！？」

実宵は急に言葉を詰まらせた。何故なら、先ほど糸使いは糸を張り巡らせるだけだったが、今度は教室にある椅子、机、更には掃除用具の入ったロッカーを糸で持ち上げ、刻の頭上に持ち上げ、そして糸を緩め、支えを失った椅子達は重力に従って落下し始めた。

「チッ！！！」

実宵は舌打ちをして刻の元に駆けた。しかし間に合いそうもなく、刻は起きる気配が見えない。

実宵は咄嗟に詠唱を始めた。

「万物の法則を読み解き、されど我は望む、一度の開放を、一度の自由を、この鎖を解き放ち我の世界を作らんッ！！！！」

実宵が詠唱を唱える終わると、刻の呼吸も鼓動も止まった。実宵の魔法は発動しなかったかのように見えた。しかし刻は死んだわけではない。外へ出れば鳥は宙で止まり、風で揺れる木々も止まり、海へ行けば波も止まっていた。刻は死んでいない。実宵の発動した魔法は時を止め、刻に降りかかる脅威を止めたのだ。

時を止めたが、その中で動き続ける実宵は短い時間しか持たないが、この時間の止まった世界において唯一の存在であり、実宵は再

び胸元のポケットから、今度は魔法陣の描かれたカードを二枚取出し、一枚を刻の方へ、もう一枚を糸使いに向かって放った。

カードを放つと同時に止まった時間が動きだし、落下物が動き出したが、刻と落下物の間に入ったカードの魔法陣が輝くと、刻は眠っていた机から実宵の足元に移動し、床に顎をぶつけた。

「ぐぇ！」

刻がくぐもった声を上げて目を覚ましたが、実宵は足元の刻を見ず、糸使いを見つめていた。

先ほど放ったもう一枚のカードは糸使いに届くことはなく、針のようなに硬質化した糸で床に張り付けられていた。

「・・・」

糸使いの顔は相変わらず見えない。暗くて見えないのではなく、顔全体を布で巻いて隠しているからだ。しかし、服装は静華の男子制服ということが分かった。

糸使いは実宵と顎を打って立ち上がろうとしている刻を見ていた。

「・・・ってぇ、ん？実宵？って、どうなってんだこれ！？」

刻は荒れた教室を見て驚愕した。

「さっさと立ち上がれ、殺されるぞ」

「殺されるぞって、・・・もしかして、目の前にいるうちの制服を

着た頭巾の奴って・・・」

刻が恐る恐る実宵に聞くと。少々意外だったか、軽く目を見開いた。

「ほう、よく気が付いたな。呪受者かどうかは分からんが、お前の命を習っていたのは確かに奴だぞ」

「マジかよ・・・。寝首をかかれるとか・・・」

刻は自分が殺されかけたと思うとゾッとして、身震いした。

「・・・・・・」

糸使いは刻を一度見ると、懐からリングを取り出して手を放すとリングは落ちずに宙に浮いたままだった。実宵にとってはもう当たり前に近くなった仕掛け、浮いているのではなく、糸に引っ掛けているだけで、光の加減で糸が見えたため刻もすぐに気が付いた。

宙に置かれたリングには糸で魔法陣の図が描かれており、糸使いはリングの天辺を指ではじくと、キンッ、という金属音と共にリングといつの間にか張られていた糸が光り、更に糸使いの後ろから幾重にも交差された糸が複雑に絡み合い複数の魔法陣の文様を作り出し、リングの魔法陣を起動装置として後ろに張り巡らされた糸の即席魔法字を起動させた。

「ちッ!!連鎖型魔法陣か!!」

「連鎖型って、確か・・・」

刻は昨日、深夜まで行われた実宵の講義を思い出していた。

連鎖型魔法陣とは、魔法陣を複数個重ね合わせて一つの魔法陣よりも格段に強力な魔法を生み出す魔法陣の応用型であり、一人で行うのはかなり難しい事だ。まず連鎖型魔法陣は魔法陣を描いた線、糸使いの場合は糸であるが、連鎖を行う時にこの線を繋げることで連鎖を行うことが出来、連鎖をするのに時間がかかり、発動にも時間がかかるために基本使われない。しかし、前述した通り連鎖による魔法は強力であるため、大昔の大戦ではかなりの頻度で使われたと刻は聞いていた。そして、糸使いは時間がかかる筈の魔法陣を実宵に気づかれることもなくいつの間にか完成させていた。

「刻！！」

「は！？」

実宵は凄まじい形相で刻の方を向くと右手で頭を掴み、左の袖からカッターナイフを取り出すと刻の頬を薄く切って血を流させ、指で掬い取ると自分の指を切って自分の血と刻の血を混ぜるという一連の動作を一瞬でやってのけ、実宵は詠唱を始めた。

「紅き結晶と我が声に応じ、世の理の書を開けよ」

実宵が早口で詠唱をしていると薄暗い教室の室温が下がったような違和感を刻は感じた。

「時の凍結、暗闇の朝、我の言葉に従え」

刻の違和感は増えた。窓から見ることの出来る空が暗くなっているかのように見えたのだ。

実宵の詠唱をしている間も連鎖型魔法陣は止まるわけはない。

「我は掌握する汝の時を！！凍りつけ！！」

実宵が詠唱の最後を言い切ったが、連鎖型魔法陣は輝き魔法が発動した。しかし実宵は顔色を変えなかった。

連鎖型魔法陣が発動したが何も起きることはなく、しかも糸使いはその場に崩れてしまった。

「ふう、奴が何をしたかったかは分からないが、面倒なことは止められただろう」

「実宵、お前何をしたんだ？」

刻は実宵に聞いた。

実宵が行ったのは基本としては媒体型と呼ばれる魔法の発動の仕方で、発動するために物を使う。しかしどこか違うことを刻は直感的に分かっていた。

「ん？ああ、説明していなかったか？魔法の発動に不可欠なものは昨日説明したな」

「ああ、確かマナだったな」

「そうだ」

マナとは実宵が刻に尋ねたように魔法を発動するために必要不可

欠なものである。マナとは地球上のどこにでも存在し、如何なる生物の体内、如何なる物質にも存在しており、石油などと同じ有限のモノである。

魔法を発動する場合、マナを消費して発動する。

発動の仕方は基本的には三種類あり、まず実宵が一瞬だけ時間を止めた時にした様に、詠唱を行い、自分の体内に存在するマナを消費して発動する『詠唱型』。

次に魔法陣を紙などに描いて詠唱をせずに発動する『陣式型』で、此方は体内のマナを消費せず、自然界のマナを消費して発動する。

最後にモノを媒体とし、詠唱をせずに発動する。魔法の威力、効力は媒体にしたモノのマナに比例する『媒体型』。血の付いた糸を焼き尽くしたのがこれであり、刻が疑問を抱いたのがこの存在である。

媒体型は詠唱を必要としないが、実宵は詠唱をして魔法を発動した。刻は実宵が一体何をしたのかが分からなかった。

「私がやったのは、媒体型と詠唱型を掛け合わした複合型と言ってな、今回私はお前の血と私の血を混ぜたものを媒体としただろう？媒体型を使う上において複数のモノを媒体とする場合、詠唱が必要になるんだ。」

「なんで、講義の時に教えてくれなかったんだよ・・・」

「刻みたいなひよっこにはまだ使いこなせるとは思わなかったからな」

「ひよっこで悪かったな！！」

「まあ、刻にマナを感じ取る素質があったことは私にとって、驚きだったけどな」

魔法自体は、どんな人間でも陣式型なら使うことが出来る。事実、辻風にはマナを感じ取る素質は無く、詠唱型も媒体型も唱えることはできないと実宵が言っていた。

「さて、あの糸屑使いが呪受者かどうか調べないとな」

実宵は未だに倒れて動かない糸使いの方へ歩いて行った。

「おい、大丈夫なのか？」

「心配ない、こいつの時間は止まっている。さっき私が発動したのは時空間型の魔法だ」

時空間型とは、魔法の種類の内で上位型と呼ばれる魔法の種類の一つのくくりである。

「あぁ、基本四大型とかいう奴の上の魔法のことか」

刻は昨日の講義のことを思い出し始めた。

刻の家の居間に置いて行われた講義は初めに魔法の発動の仕方の種類を刻は教わり、次に素質があるかどうかを調べられ、そのあとに魔法の種類について教えられた。

「魔法には難易度のようなものがあり、基本となる魔法を基本四大型と言い、自然型、幻影型、具現型、癒毒型がある」

「基本四大型って・・・、そのままだな」

「うるさい」

実宵に睨まれ、身を縮めた。実宵は辻風として授業をしていた時も、自分の話の腰を折るものには厳しかった。

「魔法を使う上で、基本四大型の内、得意なものによってその魔法使いの性質が変わってくる。刻の得意なものはまた今度調べるからな」

そして次にその上の魔法について実宵は話し始めた。

「私の使う、魔方陣による瞬間移動は基本四大型の上の上位型の魔法で時空間型と言い、時を止めたり早めたりすることや、瞬間移動を可能にする魔法だ」

そしてこの後実宵は自分の魔法について語り始めてしまい、その後の記憶はあまりの眠たさにほとんどの記憶が無くなっていた。

現在に戻り、時空間型の魔法で死んではいないものの、実宵は動きが一切できなくなった糸使いの顔に巻かれた布を取った。

「・・・これは!?」

実宵が驚いたような声をあげたのを聞いた刻は実宵の方へ近づいて行った。

「どうし、・・・なっ！？」

刻が見た糸使いの隠されていた顔は――――

「な・・・、そんな・・・、ありえない、なんで、なんで、なんで氷我思が・・・」

刻が見た糸使いの顔は昨日まで他愛のない話で笑いあい、貶し合い、冗談を言い合っていた刻の交友関係上で親友と呼べる少年、仁思　氷我思だったのだ。

第八話　糸使い（後書き）

普段よりも長くなってしまいました・・・

第九話　解呪と七不思議（前書き）

個人的に長くなってしまったことと、多分見ずらいです。
すみませんm（ー＿ー）m

第九話　解呪と七不思議

刻の命を狙っていた糸使いは、刻の親友であるはずの仁思　氷我思であった。

信じたくない。ありえない。何かの間違いだ。偽物だ。そうだ、ただ顔が似ているだけだ。刻の頭の中で、様々な考え、いや、現実逃避のための言葉を並べていた。

刻にとって、この状況は凄まじく危険であった。親友だと思っていた人に殺されようとしていた。信じていた人から裏切られることは、どんな痛みよりも苦しいものである。

刻にとって氷我思の裏切りは人間不信にもなり兼ねないかもしれないほど、氷我思という存在は大切なものであった。

「嘘だ、嘘だ嘘だ、なんで、氷我思が・・・」

刻が頭を抱えてその場にうずくまっていると、実宵が氷我思の状態を調べ終わり立ち上がると口を開いた。

「ああ、お前の考えは間違いだ。よかったな、裏切られていなくて」

実宵がそう言うと、刻は顔を上げて実宵の目を見た。

実宵を見る刻の目には喜びと疑問が入り混じっており、まさに実宵が予想していた反応を見せている。

「・・・どういうことだ？」

刻はすがるように実宵の肩を掴んで返答を求めた。

「そのままの意味だ。単純にお前はこいつに狙われはしたものの、こいつ自身がやろうとしたことじゃないということだ」

「な、なら何で氷我思は俺を殺そうとしたんだよ！？」

刻自身は見たわけでわな医が刻の親友である氷我思が刻を殺そうとしたことは事実である。このことはどうやっても覆すことは出来ない。

だが、実宵は事実を覆さなかったが、氷我思には刻を殺す意思が無かったことをさも当たり前のことのように話始めた。

「こいつ、確か仁思だったか？まあ、取り合えずこいつからは詠唱型の魔法の名残が極僅かだが感じる」

魔法の名残とは、単純に魔法を使った後に残るもので、発動の仕方によって感じが違い、匂いなどと同じように時間が経つにつれ、魔法の名残は薄くなっていく。その名残を感じ取るために、本末転倒のような気もするが、『基本四大型魔法』と同じく、『影響魔法』と呼ばれる種類の『解読型』を使うことで感じ取ることが出来る。

解読型とは、前述した通り魔法の名残を感じ取るための魔法で、あまり使われるものではないが、この魔法は魔法を使ったか、または、魔法を受けたかが分かる。因みに、人以外の生物に使うことも可能であり、魔法が使われたような形跡のある場所に発動すれば、その場所での魔法の発動の有無が分かるのである。

「氷我思が詠唱型を使ったんじゃないのか・・・？」

「いや、恐らくこいつにはマナを感じ取る素質はない。そしてもう一つ、呪受者の中で人を操ることができる能力を使える者がいる。おそらくその能力を持った奴がこいつを操り、お前を殺そうとしたんだろう」

「じゃあ、氷我思が本気で殺そうとなんて・・・」

「ああ、恐らくないだろう」

良かった。刻の頭は今これしか考えられなかった。

自分が殺されかけたという事など、とうにどこかえ吹き飛んで行っており、一瞬でも親友である氷我思を疑った事を刻は心の中で恥じた。

「さてと、こいつにかけられた魔法の解呪を行うとするか。刻、手伝え」

「分かった」

無論親友を助けるためなので、喜んで承諾した。

刻が承諾するとポケットからピンクの携帯を取り出すとどこかに電話をかけ始め、短い会話の後電話を切った。

「お前がピンクの携帯って・・・」

「文句あるか？」

「いいえ、一切ありません！」

実宵の恐ろしい目線を見てこのまま自分も時間を止められてしまいそうだったので、刻はすぐに実宵に謝罪をした。

ついでに実宵の服装を見ると、黒のブラウスとジーンズを着ており、落ち着いた———というよりも先ほどの威圧する目と合わせて若干の怖さを刻は感じている。

「よろしい。じゃあ、こいつをここから運ぶから行くぞ」

刻が氷我思を背負うと、辻風の部屋でも差し出された、漆黒の黒髪とは真逆の白陶磁器よりも白い天使の羽のようなと言うのに相応しそうな手を刻に差し出してきた。

刻は頷いた。

前回とは違い、物おじなど一切せずに差し出された手を握った。

この刻の行為の成長は講義の時になかなか手を取らなかったことを散々弄られてしまい、苛立ちを覚えた刻は二度と実宵に気を使うのはやめることにしたのである。

「では、行くぞ」

言った瞬間に刻の目の前が一瞬輝き、始めての時は驚いたが一回経験して慣れてしまい、輝きが目を刺激するものではないことが今回で分かった。

輝きが終わると目の前は見知らぬ部屋であった。しかしこの部屋の雰囲気が恐ろしく荘厳であることは分かった。

刻の立っている所はどうやら部屋の中央らしい。部屋の壁と天井は真っ白な大理石で作られており、床も刻の立っている一部を除いて白くなっている。

床には実宵が使うような魔法陣とは違い、巨大かつ、複雑、そして先ほど見たのとは違う巨大な魔法陣の周りと中心に小さな魔法陣が複数描かれた、連鎖型魔法陣が半径二メートル位の円が白い線で描かれていた。

「ここは・・・？」

「あれを見れば分かるだろう」

実宵が伸ばした指のさす先を見て刻は「ああ・・・」と呟いた。刻は中を見たことはなかったが、教会の中であることが分かった。刻の向いている方向の上にはステンドガラス、まっすぐ進んで行って階段の上には懺悔するためのものであろうか、十字架があり、聖マリアが優しく微笑んでいた。ここは七受市の外れにある教会である。

「お待ちしておりました、実宵様、それに刻様ですね」

不意に刻の後方から聞いたことのない声が礼拝堂内に響いた。

刻が後ろを向くとシスターの格好をした女性がいた。首からは革の紐で十字架が下げられており、女性のかぶる白と黒の聖帽からは如何なる装飾品でさえも見劣りする程の金の糸が見え、瞳の色はエメラルドの様な色と美しさを持っていた。

「ラファか、すまないなお前にしか出来ないことでな」

「気にしないで下さい、これが私の役目ですから」

ラファと呼ばれたシスターは後ろの彫刻のマリアと比べ――――マリア像に温かみがないわけではないが、人としての温かみのある笑みを浮かべた。

「さっそく解呪を始めますのでその方を陣の中心に寝かせて下さい」

ラファが指をさす先は刻に背負われている氷我思を指さしていた。

ラファに言われた通り氷我思を寝かせ、刻は魔法陣から出ると、入れ替わるように鞘に入れられた短刀を持ったラファが陣の中に入る。

「では、始めます。刻様は初めて見られると思いますので、少々刺激があるかもしれないと思っていてください」

いったい何の事かと疑問に思ったが、刻の疑問はすぐに消え失せた。

「――――っ！？」

ラファは手に持った短刀を鞘から抜き放ち左の袖を捲った。彼女の左腕には包帯が巻かれており、所々に紅い染みがあった。包帯を外していくとラファの左腕にはいくつもの切り傷があり、短刀を傷のついていない場所にあてて、その肌を薄く裂いた。

紅い血が腕をつたり、掌を流れ、指先から落ちて白い――いや、薄く血が変色した黒さの残る床に紅い血溜まりを作り出した。彼女は短刀の切っ先を下に向け、両手で柄を握って目を閉じた。

「癒しの風、医と癒しを司りし大天使よ、此処に舞い降りることを願います」

連鎖型魔法陣に加え、ラファアの血を媒体にし、更には詠唱も加えたこの魔法は、ある特定の人のみが使うことのできる魔法――正確には儀式である。

儀式は特定の魔法を発動させるためだけに作られた術式である。

「舞い降りて彼の者にかけられし呪縛、彼の者にかけられし病、彼の者にかけられたる負のモノを解き放つことを願います」

ラファアの声は協会に淡く響き渡る。

「この場に助けを乞う者あり、我は彼らの願いを代行する、捧げるは純潔の血、この声に応え舞い降り解き放ちたまえ――大天使ラファエル！！」

ラファアが詠唱を終えた瞬間、魔法陣の上から眩い光が降り注ぐ。陣の上からラッパや鐘の音が聞こえそうなほど神々しい姿をし、髪は人間のものとは思えない美しい白髪、背中に何対かの翼を生やした女性が舞い降りてきた。

儀式はこの天使を下ろさせる為だけに必要な術式で、この魔法を降天魔法という。

降天魔法は天使と契約を結んだ者のみが使うことが出来る特殊な魔法である。

刻は本能的に分かった、この舞い降りてきた翼を生やした女性が人ではないと。この女性が天使であることを。

実宵を表した言葉は失礼ながら間違っていたようである。天使の羽の様に白いと言ったが、本物の羽は予想を超えた白さであった。

彼女が天使であると分かった瞬間、刻に頭痛が襲い掛かった。

「――――っが！？」

突然目の前の風景が変わった。以前見たことのある風景だった。

「あなたは何故、恨んでいるのです？」

「・・・」

流れるように澄んだ声が聞こえ、声の方を見たかったがそれは叶わなかった。刻はこれが自分に刻まれた記憶の主が見ていた光景であるという事に。

「主は、私たちにも愛を与えてくださいました。なら、人間に愛を与えるのも当然のことでしょう？」

「・・・」

見ている光景が変わり、ラファが呼び出した天使が目の前にいた。

「・・・」

「何も語ってくれないのですか？私は貴方にも人間を愛して欲しいのです。私たちは未来を見る術を持っていませんが、私は思うのです。人間はいずれ劇的に繁栄し、私たちの予想を超えた存在になる。主は悲しんでおりましたよ、貴方が人間を毛嫌いすることを」

刻の記憶の主が重い口を開き始めた。

「・・・ラファエル、その話を俺が語ることは出来ない。だが、お前にだけ少し聞いてほしい」

記憶の主――――ルシフェルの声は刻の予想に反して優しく、温かみさえも感じられるほどのものだった。

「俺はある事を知ってしまった・・・。もう、戻れそうにない・・・」

ラファエルの目が大きく開かれ、落ち着いていた口調が乱れ始めた。

「何故です！？貴方は主に抗うつもりですか！？貴方ほどの天使なら主も簡単には堕天などさせない筈です！貴方は主に、神に反乱を・・・」

「ラファエル！！」

ルシフェルが大きな声を上げてラファエルの言おうとしたことを

強引に止めた。

「ラファエル・・・。すまない、話すことは出来ない・・・」

ルシフェルは目を逸らした。

「ルシフェル・・・」

ラファエルはルシフェルの話を聞いて俯いてしまった。

「分かりました、あなたに何があったかは聞きません。きっと、次は敵なのでしょう」

ラファエルの目は、感情があってはならない天使の目が熱くなっていた。

ルシフェルが後ろを向くと、ラファエルの頬に一筋の透明な線が流れた。

「すまない、ミカエルを頼む」

ルシフェルが言い終えた瞬間、目の前が元の礼拝堂に戻った。

「――――っくは！！」

刻は手を膝について息を荒げ、体中に汗を掻いていた。頭がまだ痛い。

すると実宵が刻に近寄り、刻の胸に魔法陣の描かれた紙を当てて陣を指で縦になぞった。すると研究棟で詠唱型魔法をかけられた時と同じように体から虚脱感が消え失せた。

「大丈夫か？記憶を見たんだな？」

「お前でも心配なんてしてくれるんだなありがとう実宵」

「ほっとけ、それよりも質問に答えろ」

刻は膝から手を放し、実宵に向き直った。若干、汗はまだかいているがすぐに引くだろうが、刻は気持ち悪さから汗を拭った。

「ああ、見た。ルシフェルとあの天使が話しているのを・・・。そうだ、氷我思は！？」

思い出してすぐさま、魔法陣の方を見ると、記憶にいた天使が氷我思に何やら手を伸ばして、手から緑の光を氷我思に当てていた。

「まだ始まったばかりだ。すぐに終わるさ」

「そうか」

刻は胸を撫で下ろし、再び実宵の方を向いた。

「ところでお前の見た天使はラファエルなのか？」

ラファエルとルシフェルもそう呼んでいたためそうなのだろう。ラファエルはまだ治療を行っている。

「ああ、ルシフェルは恐らく何か理由があって堕天したみたいなんだ」

「ん？それは奴が神に反旗を翻したからだろう？」

「いや、それとは違うような感じだった。あと、何かを話したくても話せないようだった」

「そうか・・・」

実宵の目を閉じた。

「他に何か言ってなかったのか？」

「いや、特には・・・。ただ、ルシフェルとラファエルってのはかなり親しかったみたいだな。あと、ミカエル・・・だったかな、そいつを頼むって言ってたな」

「なるほど、ルシフェルとラファエルがそんな関係だったとはな・・・」

「ふむ・・・」と言って、実宵は腕を組み、話し始めた。

「ミカエルというのは、ルシフェルと兄弟のような存在だったと記述があってな、その容姿はそっくりだそうだ。ミカエルとは、神の如き者の意味を持っていて、ラファエルと同じ四元の天使の一人で、四元の天使とは、火、水、土、風の予言を司る天使の事で、他にあと二人いる。そして四元の火を象徴しているそうだ」

「なるほど・・・」

刻が呟くと、魔法陣の方から光が薄らいでいった。実宵と刻が陣の方を向くと、どうやら治療は終わったようである。

ラファは目を開けて、血の付いた短剣を布で拭って、鞘に納めた。一方のラファエルは笑みを浮かべながらラファに向き直っていた。

「ありがとうございます、天使ラファエル」

「いいえ、貴女は私と契約をしています。貴女が私を呼べば何時如何なる時も私は現れます」

「はい」

ラファエルの声は刻の記憶と同じように澄んだ声であり、ラファの声もまた、きれいな声であった。

「では、天使ラファエル、またいずれに」

ラファがラファエルに礼をしたがラファエルは———

「待ってください。少し、そこにいる方と話がしたいのです」

そこにいる方、というのは刻の事であった。

ラファエルは刻の方へ向き、今まで羽で宙に浮かんでいたが、彼女は拡げられていた翼を閉じ、美しい足を大理石の上に下ろした。彼女は刻の近くまで翼を使わずに歩いて来た。

「貴方が、彼の記憶を継いだ者———、『後継者』なのですね？」

「後継者？」

刻が首をかしげたが、どうやら実宵も初耳だったらしく、一瞬だけいぶかしげな顔になった。

ラファエルは笑みを浮かべたまま、再び話し始めた。

「初耳なのも仕方ありませんね、後継者というのは私たちの住む天界で使われている言葉で、堕天した天使の記憶を持つ人間の事を後継者と言います。後継者の記憶は、その記憶に関するものを見たときに一部を見るようになれます。ですが、強制的に記憶を見ることは可能ですが、その方法の場合はほとんど見ることはできない上に後継者に多大な負荷がかかってしまいます」

「強制的にみること」と聞いて実宵の方を素早く見ると、刻よりも早く目をそむけていた。

刻は、まあいいかと、ラファエルに向き直った。

「どうやら強制的にされた事があるようですね。ですが、疲労感が一気に出るだけなので、彼女の事です、恐らく回復してもらえたでしょう？」

「まあ、そうですけど・・・」

ラファエルの笑みは微笑みから、手を口に当てた上品な笑いに代わっていた。

笑みを微笑みに戻すと、優しげな目から真剣な目に変わった。

「さて、貴方には大切な話があります」

ラファエルの真剣な声と佇まいに刻も気持ちを引き締めた。

「貴方は元天使、堕天使ルシフェルの記憶を継いだ後継者です。同じくして、今現在存在する後継者は貴方が最後です。そして、私は貴方に渡すものがあります」

そういうとラファエルは掌に一枚の羽を具現させた。

「この羽は私の羽です。これには私の力の一部です。貴方にこれを差し上げます。貴方がこれを持っていれば私の力を使うことが出来ます」

「ラファエルの力・・・」

「天使が私情で力を分け与えることは許された事ではありません。ですが、私は貴方に生きていてほしいのです」

ラファエルは悲しげな目で刻の事を見ていた。

羽は、ラファエルの思いと力のこもった羽はふわりと浮かび上がり、刻の胸に吸い込まれて消えていった。

「それとこれはおまけです」

そういうとラファエルは指を鳴らすと、刻の上に光る粉が降り注いだ。

「フフッ、近いうちに貴方の役に立つはずですよ」

ラファエルはにこやかに笑うと再び翼を広げて宙に浮かび上がった。

「あ、あの！！」

突如、刻が大きな声でラファエルを呼び止めた。

「なんです？」

「氷我思を助けてくれてありがとうございました！！」

刻はラファエルに深く頭を下げた。

それを見たラファエルは再びにこやかに笑った。

「顔を上げてください。貴方は素晴らしい心を持っていますね。・・・彼が貴方を選んだのも分かります」

「え？」

ラファエルが最後に何を言ったかは刻には聞こえなかった。

「何でもありません。では、私はこれで・・・」

ラファエルの上から現れた時と同じように神々しい光が降り注ぎ、ラファエルは宙に溶けていった。

「終わったな。ラファ、傷は大丈夫か？」

実宵と刻はラファエルを降天させたラファに向き直った。

「ええ、大丈夫です。血もすでに止まっていますし」

「そうか、私の魔法でその傷を治せたらよかったのだが・・・」

「え？治せないのか？」

ここで刻は疑問の意を唱えた。

刻の知る限り実宵は魔法のエキスパートである。その実宵が治せないとはどういう事なのか。

「ああ、ラファはラファエルを降天させた。天使を降天させるためにこんな大がかりな術式を使い、発動者の血しか媒体にできない上、その血を流すための傷を魔法で治すことは出来ないんだ。だが、メリットかデメリットか、傷を治すことは出来ないがそれ以前に全ての魔法がラファには意味がないんだ」

「じゃあ、彼女は魔法が一切効かないのか」

「そういうことになる」

刻がラファの方を向くと、彼女は新しい包帯を左腕に巻き始めていた。

「包帯、俺に巻かせてくれ」

不意に話しかけられたラファは顔を上げた。

「え、いえ、そんな失礼なことは出来ません。・・・こんな傷だらけの醜い腕を人様に見せるなんて失礼すぎます」

そういって、ラファは包帯を乱雑に巻いてその場を離れようとしたが――――

「待って」

刻に包帯を巻く手を掴まれそれは叶わなかった。

刻は包帯のロールをラファから奪った。

ラファは刻にまっすぐ見つめられ、恥ずかしくなり目を逸らした。

「こんな巻き方をしたらダメだ」

「お、お止め下さい刻様！！そんなことをされては刻様の手が汚れてしまいます！！」

「違う！」

刻に大きな声を出され、ラファは黙り込んだ。

「違う。俺は君にお礼をしたい。それに君の腕を見ても俺は醜くいなんて一切思はない、むしろ俺には君の腕は凄くきれいに見える。人を助けるための自己犠牲なんて、普通じゃできないことだ、その腕を醜いだなんて俺にはとても思えない、君はもっと自信を持つべきだ」

刻にいつの間にか手を握られ、逃げるに逃げられず、醜いと思っていた腕をきれいと言われ、ラファは頬を蒸気させて俯いてしまい、左腕を出すだけしか出来なくなった。

しかし、そんな事など刻は気にせず、再び包帯を巻き始めていた。

「ラファさんには氷我思を助けてもらった恩義があるし、今俺が出来るのはこれくらいしか出来ないな、ごめんな」

「い、いえ、この様な事をしていただけるだけで充分です！そ、それと、さん（・・）など付けずに呼び捨てで構いません！！」

ラファはそう言うが、刻は受けた恩義は必ず返すように言われて育ったみである。また何れお礼をしようと考えていた。

「だったら、俺も刻様じゃなくて、ちゃんと刻って呼んで欲しいな」

刻はラファに精一杯の笑顔を浮かべたが、それはラファを壊す引き金となった。

ふらっと後ろへラファの体が傾いていった。

「うおっと！！」

刻は何とかラファを受け止め体制を整えさせた。

「す、すみません、刻様じゃなくて・・・、き、刻・・・さん」

「まあ、今はそれでいいよ、ラファ」

そんな和やかな雰囲気を蚊帳の外から見ていた実宵は苛立ちを覚えていた。

実宵は少し哀しげな目で蚊帳の中を見ていた。

#　　#　　#

「さ、こいつの解呪も終わったことだ、こいつの時間はもう動き始めている。しばらくしたら目が覚めるだろう。刻とこいつを教室に移送するから、刻はこいつをこいつの席にでも寝かせておけ。起きたら、刻が来たらすでにいたと言っておけば平気だろう」

淡々と実宵がこの後の事を話し始めた。

しかし、刻は自分の腕時計を見ると既に、クラスメイトの殆どが登校しきっている時間であった。

「実宵、もうみんな来ている時間だし、魔法で急に現れたりしたら、大変じゃないか？」

「ん？そうか…、なら幻影型の魔法をかけておこう、これで元から居たかのように誤魔化せる筈だ、他に何か問題はあるか？」

「いや、多分無いな。てか、魔法ってホント万能だな」

刻が呆れかえった顔をすると、反対に実宵は踏ん反りかええてい

た。

「何を言っている、魔法は万能なものでは無いと前に話しただろう。まあ、私がそれなりの力を持っているのは確かだが、それでも限界というものはあるさ」

「自己評価高くね…？」

刻は実宵に聞こえないようにボソッと言った。

そして、ふと思い出したことがあった。

「ところでラファは学校に行ってないのか？」

「え、あ、私はその・・・」

「？」

ラファは刻と会った時とは違う雰囲気で俯いてしまった。

「くっくっく、刻、聞いて驚け、なんとラファはお前と同じ学校で、私やお前と同年代だ」

実宵が悪者の様な笑いかたで説明した。

「え？そうだったのか？でも、見かけたことなかったと思うけどな・・・」

刻が腕を組んで唸りながら考えていると、再び実宵が喋り始めた。

「おいおい、お前は静華の特色の一つを忘れたのか？」

「特色？」

静華、というよりも舘原学園には複数の特色がある。

まず以前説明したことのある、学園全体の大きさ、学年のシンボルカラーなどがあり、刻は自分とは一切無関係であったため忘れていたが、ある事を思い出した。

それは、自分よりも、現在壁にもたれかかっている氷我思の方が近しい事であった。

「・・・もしかして、学校模試成績一位ってことか？」

刻は実宵の顔色をうかがうかのように尋ねると———

「だーいせーいかーい！」

———何処からか出したマラカスを振って、盛大なファンファーレをもらったのであった。

「本当か！？あの、学園の七不思議、あの伝説の九不思議目の謎の成績トップ者登校免除なのか！？」

「私ってどんな存在になってるんですか！？」

ラファが泣いて叫んだ。もはや、十数分前の彼女は風でどこかに吹き飛ばされたようだ。

因みに刻の言ったことは嘘ではなかった。

「いやな、今七不思議が流行ってるんだよ」

「何故、七不思議なのに七つ以上あって、八不思議目を吹っ飛ばしてるんですか！？」

「いやまあ、それは置いといて」

「置いとけません！！」

「うおう！？」

刻はラファの見方を間違えていたようであった。

刻はラファの事を落ち着いた物腰で敬語を使うシスターのだと思っていたが、どうやら、自分を貫き通す性格であったようだ。

説明が遅れてしまったが、中高等部の間にのみ学校模試成績が一位の者には登校せずに自宅学習が認められている。初等部と大学に無いのは、初等部の場合自律的に学ぶのに抵抗があると判定されたためで、大学の場合、そんなことをしなくても自分で時間割を決められるので初めから無かったのだ。

「こうなったら、私も今日は学校に行きます！！」

「はい！？」

「確か私は刻さんと同じクラスです！！」

「そうだったの！？」

ラファが自分と同じ学校であることでさえ驚きであったが、まさか自分と同じクラスであったとは刻は気づかなかった。

そしてラファのあまりの豹変ぶりに、さすがの実宵も面喰ていた。

「本気か？ラファ？」

「はい、私も学校へ行きます！！」

こうして、舘原学園七不思議・第九不思議は消えることになった。

第九話　解呪と七不思議（後書き）

駄文ですみませんでした

矛盾していた部分があったのでそこを修正しました。

第十話　登校とバカ天才の末路

ラファの熱意のこもった要望により、登校免除にも拘らず、刻達と共に登校ずることになった。

実宵はまずいきなり教室にいきなり現れても騒がれないように、刻達に元から居たように見せるための魔法、幻影型をかけてもらう準備をしていた。

幻影型とは基本四大型魔法の一つで幻覚を見せる魔法だ。有るものを無いように、無いものを有るように見せたり、信じているものを偽物に、嘘だと思っているものを真実に思わせたりすることが出来る。

幻影型の影響の仕方は三通りある。まず、発動者本人にかけて、周り全体を騙すタイプ。これは、実宵が宗教学担当講師・辻風　紫勇に化けていた、姿を変えていたのはこのタイプのものである。

次に、発動者と魔法をかけられたもの以外を騙すタイプ。これは今実宵が刻達にかけようとしているもので、更にこれには一時的なものと長時間影響室し続けるものがある。

そして最後に、発動者が魔法をかけたものを騙すタイプ。単純に魔法にかけられたものを騙す。それだけだ。

「――――霧の視界、蜃気楼の心、彼の者を幻として、他の者たちに刻み込め！！」

実宵の詠唱は終わり、刻達が教室に戻っても騒がれることは無い。

「さて、手持ちに陣式型のが無いから、これも詠唱でとばすぞ。特別にそいつの机が目の前にあるようにしてやるから感謝しろ。ただし机と一体化するようにとんでも恨むなよ」

「そんな恐ろしい冗談はやめてくれ・・・」

実宵の不気味な笑いを含めた悪質な冗談に刻は呆れたが、テンションの戻ったラファはクスクスと笑っていた。

「あれ、そういえばというか、さっきラファには魔法が効かないって言ってなかったけ・・・。今から歩いて行ったら遅刻するし、いったいどうやって行くんだ？」

「私はこちらを使うんです」

そういったラファの手には首にかけられた十字架が握られていた。十字架には細かな細工が施されており、真ん中には紅い石がはめ込まれていた。

「それは？」

「これにはいろいろな効果が付加されていまして、その中に空間と空間を繋ぐ効果があるのです。こちらは魔法とはまた違ったものなので、私の魔法を無効化してしまう体質には引っかからないのです」

「魔法とは違うもの？」

「天使ラファエルから頂いたものなので、私には一体どういったモノなのか分かりません。ですが、魔法とは違うのは確かです」

魔法とは違う。刻にとって、また新しい力であった。魔法自体も昨日知ったばかりのものであるのに、また新たな力など刻にとって面倒なものであった。

「魔法とは違うねえ・・・」

「ぐだぐだ言ってないで、少し黙っていろ、本当に壁の中にとばすぞ」

実宵に諭され、会話は自動的に終わり、実宵は詠唱を始めた。

「空間の距離を嫌う、場と場の空間を無視して歩く、距離など関係は無い、その足は何処にでも届く、彼の者を我の望みし地を踏ませよ！！」

実宵が詠唱の最後を叫ぶように言った後、刻にとって二回目の輝きが目の前を包み、礼拝堂から、刻達の姿は消えていた。

＃　　＃　　＃

「お？着いたな」

刻が周りを見ると自分のクラスであることがすぐに分かった。

どうやら実宵はちゃんと移送してくれたことに刻は安心した。

「よっと・・・」

一番窓際の前から二番目の氷我思を机に座らせるとすぐに目を覚ました。

「ふぁああ、良く寝た。お！おはようさん、ハサミ」
「だれが文房具だ、俺の名前は刻だ、アホ天才」
「俺はアホ天才じゃない、バカ天才だ！」
「かわんねぇよ！！」
氷我思の体に異常は特にないらしく、自分がなぜ寝ていたのかという事も疑問にも思っていないらしい。
ＨＲまで残り七分
＃　＃　＃
「行ったな」
刻達が消えたのを確認すると、ラファに向き合った。
「ラファは学校に行くんだったな」
「はい、実宵様はこれからどうされるのです？刻様の護衛をなさるのではないのですか？」
ラファが実宵に尋ねると、実宵は何かを含んだような笑みを浮かべ、「クククッ」といささか気味の悪い声を出した。
「なに、ちゃんと考えはあるさ。それに保険はかけておいたからな」
「保険、ですか・・・」

「ああ。ところで、ラファは静華に行くわけだが、少し、此処を借りたいんだが、構わないか？陣式用の紙を作っておきたいんだ」

「はい、構いませんよ。鍵はかけておきますね」

鍵をかけておくという言葉に疑問は無かった。実宵は空間を移動できるため、鍵など関係ない。

「ああ、すまないな。そうだ、何か書くものを貸してくれないか？」

自分が陣式型の紙しか持っていないことに気が付き、ラファに羽ペンとインクを借りた。

「こちらで宜しかったですよね」

「ああ、色々とすまないな」

ラファは実宵に頼まれた物を渡した後、教会の外へ行く扉とは違う扉をあけて礼拝堂から出ていった。

実宵は陣の描かれたカードを取出し、床に置くと小さめのテーブルとイスが具現化され、実宵は何も書かれていない普通の紙と硬めの紙を取出し、ただの紙に魔法陣を描くと、硬めの紙に合わせて、物理的なものでは無い力を込めると、何も書かれていなかった紙にも魔法陣が描かれていた。

携帯する陣式型用の紙を作る場合、魔法陣の描かれた物と陣式型の発動をさせたい物と合わせ、体内のマナを少し注ぐことで、携帯するタイプの陣式型の魔法陣を作ることが出来る。

因みに、壁や地面、建造物に描いた場合はこのような動作はマナが自然界から自動的に注がれるため必要とされない。

その一連の動作を何回かしていると、ラフアが服装を変えて戻ってきた。

その服装はもちろん静華高校の女子の制服だった。

金髪碧眼の日本の制服姿は日本に住んでいたとしてもなかなか見ることは出来ない。もし、これを氷我思が見たとしたら――

#　　#　　#

「やっぱ、金髪美人っていいよな、しかもそれに制服を着ていたらもう、最高だよな、男の夢だよな・・・。あぁ、会ってみたい・・・」

「お前は・・・・。あるわけな・・・いや、夢ではないとだけは言っといてあげよう」

「なんだよ、その意味深発言は？」

実物を見たばかりの刻にとって、氷我思の夢は夢ではなく現実だ。しかも、来ると分かっている時点で、制服を着てくることも分かっているため、静華の制服を着た金髪美人の存在は確定していることも分かっている。

「ねえ、何の話してんの？」

声の方を向くと那実が立っていた。

「ああ、氷我思が金髪美人がうちの制服を着ているところを見てみたいって言ってるんだ」

「はぁ？あんた何言ってんのよ、ほんとアホね・・・」

「だれが、アホだ、俺は・・・」

「「バカ天才だ」」

先に自分が言おうとしたことを言われ、格好良くポーズでもきめようとしていたのか、何やら異様な姿で固まっていた。

「さっき、聞いてた」

「聞いてたのかよ・・・」

ＨＲ開始まで残り五分

＃　　＃　　＃

「着替えたのか」

特に興味があるわけではなかったが、思わず声をかけていた。

ラファは夏に入る直前にもかかわらず、夏服の上にカーディガンを着ていた。

「はい、学校に行くわけですから」

実宵は作業を止めてラファに近づいていき、徐(おもむろ)にラファの制服を触った。

「まあ、そうだな・・・。ふむ、これはなかなかいい素材を使っているな・・・」

「分かるのですか？」

「それなりにな。というか、辻風さんの事だ、いい素材を使わせるに決まっている」

実宵は息を吐いてそう言うと、ラファは絶えぬ笑顔で―――

「それはそうですね。折角頂いたモノですから、もっと大切にしないといけませんね」

「お前はそれに袖を通すのは初めてじゃなかったか？」

「いえ、そういう意味ではなく、ちゃんと着ませんと辻風様に失礼ですから」

と、ラファは言うと、すでにＨＲまでの時間がほとんどないことに気が付いた。

「あ、私はそろそろ行かないといけませんので、そちらは何処か適当な場所に置いといてください」

「ああ、分かった、行って来い。私も暫くしたら近くにいる、と言っても、姿を見せるつもりはないけどな」

「はい、それでは行ってきます」

扉に近づき胸元の十字架を鍵穴に当て、コツンと軽い音が鳴り、ドアノブに手をかけて静かに開けた。

ＨＲ開始まで残り一分

#　　#　　#

「ねえ、昨日どうだった？」

「どうって？」

「昨日、辻風先生に呼び出されたじゃない？結局なにされた？」

那実は昨日の辻風、もとい実宵の授業で問に答えられなかった刻のその後の事が気になっていた。

昨夜、刻は実宵に今まで問に答えられなかったものには一体何をしていたのかを聞くと、

『知りたければ、当人たちに聞けばいいだろう』

とはぐらかされ、聞き出すことは出来なかった。

因みに、当人たちは今は普通に学校生活をしているが、初めは実宵の授業が始まる前にどこかへと疾走（逃亡）するという事が起きていた。

さらに余談だが、これは舘原の七不思議の八番目であったりする。

「ああ・・・、あれな・・・まあ、課題見たいのを少し出されただけだよ」

無論、これは嘘だ。事実をいう事は出来ないため刻はそう言っただけである。

「課題なんて大変だなあ、手伝うか？」

「いや、頑張って一人でやってみるさ。ありがとうな、手伝うなんて言ってくれんのはお前だけだな」

「そうか、頑張れよ」

「ああ」

刻達が話していると、ＨＲの開始を告げる鐘が鳴り始めた。

生徒たちは、各々の教室に入って自分の席に着き、刻も氷我思と同じ列の後ろから二番目の席に着くと個性的な髪の跳ね方、というよりもアホ毛でジャージを着た女性、担任の司馬　維音が教室に入ってきた。

「はーい、じゃー、今日は皆に大切なお知らせがたった一分前に入ってきましたー」

司馬は普段からこのように面倒くさそうに物事を言う。しかし、本当に面倒くさいと思っているわけではなく、昔からこの喋り方なのだという。

「せんせー、大事なお知らせってなんですか？」

氷我思が司馬に質問すると、

「すぐに分かるわよー、入ってきてー」

司馬がそう言うと、先ほど司馬が入ってきた扉が再び開いて誰かが入ってきた。

だが刻には誰が入ってくるかが分かっていた。自分の後ろの誰も座っていない席、クラスの誰も知らなかった姿、それを刻は知っている。

「はーい、転校生ってわけじゃあ無いんだけど、今まで学校に来てなかったから、転校生みたいな登場にしてみましたー。それじゃあ、自己紹介よろしくねー」

「はい」

司馬に返事をしたのは、ラファであった。

刻もさっきラファの存在を知ったばかりのため、よく知っているわけではないが知り合いではある。

制服姿のラファは修道服の時とは違った印象を刻に与えた。

「天河・L（ライフ）・ラファです。よろしくお願いします」

そういうと頭を下げた後に笑顔を見せた。

「はーい、天河さんは学校模試トップに与えられる、登校免除と家の都合で学校に来ていませんでしたが、今日から学校に来れることになりましたー、はくしゅー」

司馬がそういうと、ほとんどが男子の盛大な拍手が上がった。

あまりの拍手の大きさにラファは驚いて目を丸くしたが、すぐに慣れて笑顔に戻った。

「天河さん、何かわからないことがあったら、俺に何でも聞いて！！」

などと、氷我思が言うと、他の男子生徒がもう講義に出た。

「まて、俺がやる！！」

「違う、俺だ！！」

「ワイがやるんや！！」

「俺だ！！！」

男子の騒ぎはどんどん大きくなっていったが、そこを止めるストッパーがこのクラスには存在する。

「いい加減にしろ！！」

ズドンと、氷我思の腹に凄まじい威力のパンチが叩き込まれ、氷我思の体が宙に飛んだ、いや、飛ばされた。

氷我思にパンチを叩き込んだのはこのクラスのストッパーこと、那実であった。

「何しやがる！！」

氷我思は素早く起き上がり、那実に食って掛かった。

「あんたたちがバカみたいに騒いでるからでしょうが！！」

「なにぃ！？」

普段ならこのまま、さらなる争いに発展するのだが、ラフアが二人の言い争いをみて、おろおろしていたため、司馬が止めに入った。

「はーい、いいかげんにしなさーい。でないと、成績から引いちゃうぞー」

司馬が仲裁に入ると、二人は言い争いを止め、席に座った。

「天河さんをサポートしてもらう人はもう決まってるから、君たちの争いは不毛なだけだよー」

二人が席に着いたのを確認すると、ラフアの動揺も収まっていた。

「ごめんねー、天河さん、うちのクラスってこんな感じなわけだけど悪い奴は一人もいないから安心してねー」

「い、いえ、とても楽しそうなクラスで私も安心しました」

「それはよかったよー、んじゃあ天河さんをサポートしてくれる人

のはっぴょーといこーかー！！」

『オォ――――――！！！！』

司馬が男子を煽ってしまい再び男子から喝采が上がった。

「とまあ、こんなの盛大にやるのは冗談として、天川さんをよろしくね――――」

その言葉を聞いた途端、一瞬で男子生徒諸君は背筋を伸ばして、司馬が言うのを待った。

「――――凪裂君」

「はい？」

『はぁ！？』

刻は素っ頓狂な声を上げた。

そして、ほとんどの男子が声を荒げ、怨念の籠った視線と鬼の形相と共に刻の方を向かれ、刻の顔から汗が流れた。

「センセイ、ナンデ刻ナンカガ天河サンノメンドウミナノデスカ・・・」

氷我思が男子を代表して、聞くもおぞましい声で司馬に問いかけた。

「そりゃー、もちろん、天河さんが面識があるって言ってたからだ

よー」

『何！！？』

氷の目線と般若の形相と共に再び刻の方を向かれ、初めは晴れていたが今はどんよりとしてしまった曇った空をを見ていた。

「はーい、じゃー、天河さんは凪裂君の後ろにある席に座ってねー、ほんでもって、ＨＲしゅうりょー。きょーも頑張ってねー」

司馬が軽快なスキップをしながら教室を出ていき、ラフアが刻の後ろの席に荷物を置いた。

「改めてよろしくお願いしますね、刻さん」

「あ、ああ、こっちこそよろしくな」

刻とラフアが挨拶を終えるとすぐに他の男子が刻の席の周りを取り囲んだ。

「刻、いったいどういう事か、話してもらおうか・・・」

氷我思が刻の机に手を付き、静かに、されど何処か怒りが混じったように尋ねた。

「いや、ただ単に知り合いなだけだって・・・」

「ちがう、俺が効きたいのは、どうやったらあんな美人と出会えるかってことだよ！！！！」

「下らないこと聞いてんじゃない！！」

急に、刻の周りにいた男子生徒が散らばると、ラファ何事かと思ってたが、すぐに答えを見ることが出来た。

奈実は華麗な足払いと同時に氷我思の首にラリアットをくらわせ、本日二度目の空中浮遊体験をさせた。

「ゲホっ、ゲホっ・・・、何しやがる！！」

「あんたがバカだからでしょうが！！」

「おれはバカじゃない！ば――――」

「やかましい！！」

「え、ちょ、まっ・・・ぐはっ！！！！」

氷我思の手首と胸元を掴み、そのまま見事な背負い投げをくらわせた。

「あ、あの、その方は大丈夫なのですか？」

ラファが心配そうに尋ねると、恐ろしいスピードで起き上がり、ラファの手をとった。

「大丈夫ですよ、天河さん。あなたの笑顔があれば、俺は何度でも起き上がります！」

「は、はあ・・・」

氷我思の回復能力にラファは苦笑いを浮かべていた。

氷我思は普段から那実の攻撃、というよりも剛撃(ごうげき)を受け続けているため、那実の剛撃で一秒も地面に伏せていることは無い。

そして、これはこのクラスの日常茶飯事なので、氷我思がバカなことを言ってると感じると、すぐに氷我思から離れる。これは那実の剛撃に巻き込まれないようにするためである。

那実のパワーは学年に留まらず、学校中に知られているため、氷我思以外剛撃を食らったものはいない。

「というか刻！なんでお前はそんな美人と知り合いなんだよ！」

「いや、何故と言われても・・・。ただの知り合いなだけだし・・・」

「お前だけ美人と知り合いなんてズルいじゃねえか！！」

「ズルくはねぇよ、それにお前には那実がいるだろう」

「だれが、アイツで喜ぶか！！って、あ・・・・」

氷我思は思い出して、すぐ後ろを見ると鬼さえも泣いて逃げてしまうような、形相をした那実が立っており、両手の手を鳴らしていた。

「へえ、あんたって、あたしのことそーゆーふーに思ってたんだー、へー、じゃーあー、あたしが、こーいう事してもー、へーきなんだ

よね？」

那実はゆらーりと上体と右腕を後ろへ下げ、右の手を思い切り握ると鳴らしたばかりだというのに再びポキりと鳴った。

「え、いや、じょ、冗談ですよ？な、那実さん？お、俺は、や、やさしい那実さんの事が大好きなんだけどなー、ていうか、こ―いう事って一体・・・」

氷我思は両手をブンブンと振るも意味はない。

「そーれーはー、こ―いう事だよバカ天才！！」

那実は恐ろしい声から鬼の声に変えながら、右の拳を氷我思の顔面に叩き込ませた。

「その後、彼を見たものはいないと、い、う、ガクっ・・・」

第十話　登校とバカ天才の末路（後書き）

駄文、すみませんでした

楽しんで読んでもらえたでしょうか？

もし、少しでもクスリとでも、していただけたら幸いです…

第十一話　関係（前書き）

最近何かと忙しかったので、ものすごく投稿が遅れてしまいました…。

第十一話　関係

氷我思が那実の剛撃を喰らうも、僅か十秒足らずで復活した。

「で、クールに落ち着いて聴かせて貰おうか、お二方の関係を…」

氷我思が片目をＣＧか何かで加工したかのように目の周りを青くしたゾンビの様な顔をズイっと近くに寄せてきた。

「いや、関係と言われても、お互いに共通の知り合いがいるだけだし…なあ…？」

そう言って刻は自分の横にいるラフアに同意を求めた。

ラフアは自分に回された視線に若干の戸惑いを感じながらも、刻の言葉を肯定した。

「え、えぇ、そうです、私と刻さんははっきり言ってしまいますと、そこまで親しい関係ではありません」

「ほらな？」

顔をラフアから先程よりも色の濃くなった痣を持った氷我思の方に向き直った。

されど氷我思は疑いの目を向けていた。

すると、半ば興味なさげだった那実が助け舟をだしてきた。

「別に良いじゃない、あんたが気にする事じゃ無いんでしょ、おんなじ事ばっか言ってると天河さんに嫌われちゃうわよ？」

それを言われた氷我思は腕を組んで少しの間の葛藤の後、顔を上げた。

「ま、そうだな、女の子に嫌われてまで知りたい事なんか俺には無いし、それに考えてみたら、刻みたいな奴でも既にクラスに知り合いがいた方が何かと楽だもんな」

「誰がみたいな奴だ、バカ天才…いや、成績一位のラファの方が頭良い訳だから、天才が消えてただのバカだな」

「お前、そりゃねぇよ…」

氷我思が落ち込むと、そのやりとりが面白かったのか、はたまた下らなかったのか、ラファはクスクスと笑っていた。

「お二人共仲がよろしいんですね、そんなご友人がいらっしゃって羨ましいです」

ラファがそう言うと、刻、氷我思、それと那実は顔を合わせ、再びラファの方を向くと三人共満面の笑みを浮かべた。

「何言ってんだ、ラファはもう俺達の友達だぜ？」

刻が言った。

「そうそう、こんな感じの事は日常茶飯事だぜ？」

氷我思が茶々を入れる様に言った。

「こいつが変な事しようとしたり、されたりしたらあたしに言ってね、ブッ飛ばしてやるから」

那実が妹を守る姉の様に言った。

「このクラスにいる限り、飽きたなんて言葉はいわせないよ〜？」

「うおっ！？」

何処からかやって来た、と言うよりも背負われてやって来た磨輝が何処からともなく現れ、氷我思が驚いてのけ反った。

「大変かもしれないでござるが、楽しいでござるよ」

磨輝を肩車した剣吾が穏やかな口調で言った。

磨輝を言葉で表すなら神出鬼没、天真爛漫である――――。彼女を天真爛漫と表されるのは恐らくすぐに分かるだろう。

しかし、神出鬼没――――。この言葉が磨輝に当てはめられるのは彼女の下、つまり、剣吾の存在があるためである。

しかし、この事は後に置いておこう。ネタバレを此処でするのは無粋だ。

「お前らは本当にいきなり現れるな…」

氷我思が呆れた様に二人を見て言うと、

「アハハハ、驚いて貰う為にやってるんだもん、いきなり出てこなきゃ驚いてくれないもん（笑）」

「括弧笑いを口で言うな！！」

磨輝と氷我思の絡みにより、二人に那実と剣吾を加えた四人でラフアそっちのけで騒ぎ始めてしまった。

刻がラフアを横目で見ると、少しオドオドとしていた。

刻はそっと肩に手を置いた。

「オドオドしなくたって平気だよ。みんな俺の友達だし、かなり濃いメンツだけど、悪い奴は誰一人としていないから安心しなよ」

刻はラフアがまだ緊張していると思い、笑って和らげようとした。

「はい、でも不安は一切有りません。刻さんのご友人なら、良い方々だと信じていますから」

そう言って、ラフアは自ら四人の会話に入って行った。

刻の心配は必要はなかったわけであった。

――――うん、良かったな。……しっかし、ラフアがあんなに行動的だったのは以外だよな……

うむうむ、と口から若干洩らしながら頷き、刻自身も会って間も

無いのだが、さながら親が子を見るかの様に眺めていた。

しかし、話に盛り上がるラファ達の会話に加わろうとした時、刻は僅かな違和感を覚えた。

その違和感の正体は直ぐに分かった。

糸である。

糸、といっても服のほつれによる糸屑などでは無い。那実、剣吾、磨輝の三人から、いや、刻の目にはラファと氷我思以外の教室にいる全員の頭の上から上に向かうもくうちゅうで途中で切れたキラリと光る糸が延びていた。

刻は一番近くにいる那実に近づき、頭上の糸を振り払おうとしたが、糸に触れた感触は無く、糸も切れることもなく、虚しく空を切るのみだった。

「どうした？那実の頭に何かあるのか？」

刻の謎の行動に氷我思が尋ねてきた。

「え、ああ、蜘蛛がいたから追い払っただけだ」

「え！？蜘蛛！？」

那実は自分の頭の上を払い始めた。

刻は那実の苦手なモノである蜘蛛がいたと言って、頭上を払わせて糸が消えるかどうかを試したが、結局自分でも当人にやらせても

糸は消えなかった。

――――駄目か…

しかし、しばらくすると刻の視界から糸が消えてしまい、あの糸の真意は分からなかった。

＃　＃　＃

その後、ラファは見事にクラスに溶け込むことが出来た。

ラファは話し上手、と言うよりは返し上手と言ったところで、話されたことの返しが上手いのである。つまり、何かを言えばその返答で相手の求めるものや、確実に相手に何かを与える返答を返してくれるのだ。それは、まさに聖職者の聞き上手の賜物と言ったところだろうか。

そして、午前中の授業が終わり昼休みとなった。

「キザミ～、昼飯食おうぜ～」

氷我思が授業が終わると同時に刻の元にやってきた。

「ああ。…そうだ、ラファもどうだ？」

「はい、ご一緒させてもらいます」

屈託のない笑顔で快く刻の誘いを受けてくれた。これがラファをたった一日でクラスに溶け込ませた力である。

美人、美女の笑顔は武器になる、という事を刻は実感した。

「そうか、ありがとう」

「あ、ラファちゃんも一緒なんだ」

「はい、お邪魔します那実さん」

ラファと話していると、氷我思に続いて那実、剣吾、剣吾に肩車された磨輝もやってきた。

因みに那実がラファを名前で呼んでいるのはラファが名前で呼んでほしいと言ったからであり、それならばという事でラファも那実や氷我思を名前で呼ぶことになったのである。

「わ〜い、ファーちゃんと一緒にご飯だー」

「ふぁ、ファーちゃん？」

「磨輝殿は気に入られた方にはあだ名を付けられるのでござるよ。つまり、ラファ殿は磨輝殿に気に入られたという分けでござる」

磨輝の謎のあだ名に戸惑うラファに剣吾はその意を簡潔にして伝えた。

剣吾の言うように磨輝は親しいものにあだ名を付ける趣味がある。刻、那実、剣吾には磨輝の付けたあだ名があり、それ以外の者には苗字に「――っち」や「――ちゃん」を付けて呼んでいる。

「そうなんですか。皆さんは何と呼ばれているんですか？」

ラファが尋ねると、名付けた本人である磨輝が答えた。
「えっとねー、ナミナミとミーくんでしょ、ブレくんでしょ、――」
磨輝が那実、刻、剣吾の順に見ながらそれぞれのあだ名を言っていく。
「――あと細菌類！！」
「なんで俺だけ、単細胞生物なんだよ！！」
「きゃー、イースト菌に襲われる――！」
「デジャビュを感じさせるな――？」
氷我思が大声を上げて磨輝に襲いかかろうとしたが、横にいた那実が飛びすぎないように力を抑えた、されど確実にダメージが入るようなラリアットを氷我思の首に叩き込み、ラリアットを喰らった氷我思は元の座っていた椅子に再び座らせられた。ぐったりとした状態で。
「女の子に手を上げるなんてサイテーね」
那実は氷我思にゴミを見るような目線を送っていた。
「え？あ、あの、大丈夫ですか？」
氷我思がぐったりしているのを見てラファがすぐさま氷我思を回

復させようとカーディガンの袖を捲ろうとした。

しかし、制服の袖を捲ろうとするラファの手が誰かの手に止められた。

ラファが自分のではない手の持ち主を見ると、刻が落ち着いた眼差しでラファを見ていた。

「大丈夫だよ、さっきみたいにすぐまた復活するから」

「そのとーり！！俺が簡単にやられるわけがない！」

氷我思が勢いよく立ち上がった。

「相変わらず身体だけは無駄に丈夫だな、無駄に、ホント無駄に」

と、刻。

「そうね、無駄に」

続いて、那実。

「無駄にを強調するなよ…」

氷我思は口を尖らせて違う形でぐったりとした状態になった。

それを聞いていた磨輝は、悪乗りで氷我思に言った。

「ホント、ゴ（ピー）、見たいにね」

『食事前にそれを言うな！！』

クラスにいた全員から言われてしまった。

彼女に常識と言うものは通用しない。

＃　＃　＃

ラファの登校は結果として成功となった。

終礼時に氷我思が歓迎会をやろうと提案した、が、ラファは決められた時間に教会に戻らなければならないと言った。したがって、歓迎会は行われることは無かった。

そして終礼後、掃除をする者、部活の準備をする者、下校し始める者がいる教室。

「なあ、キザミ〜〜、遊びに行こうぜー」

刻が下校の支度をしていると、氷我思が刻の右腕にに絡みついてきた。文字通りに。

「悪いけど今日は無理なんだ、てかやめろ、気色悪い」

刻は氷我思の顔を押して引きはがそうとするが、がっちりと絡みついているためはがれなかった。

「良いじゃねーか、行こうぜ」

「用事があるんだ、は―な―れ―ろ―！」

「遊びにいこーぜー」

「いこーよー」

「あー、お前もかよ！」

いつの間にか刻の背中には磨輝が張り付いていた。

「磨輝殿…」

保護者役である剣吾さえも呆れていた。

刻は剣吾に見てないで助けてほしいと思っているが、そんなことは起こらなかった。

磨輝は見た目通り重くは無いため刻にとって苦ではないが、氷我思の事もあり、更には今は夏のため、暑苦しさを覚えていた。

氷我思が絡みを強めてきたため、刻は自分の腕から血の気が引いていくのを感じていた。

「暑苦しいっての！！」

「ケブラッ！！」

ゴスッ、という鈍い音と自分のすぐそばで一陣の風を感じると共に氷我思の腹に那実の鉄拳が入れられ、氷我思の体が数メートル程飛ばされた。

刻にとっての救世主――那実が氷我思の拘束を強制的、かつ暴力的に開放してくれたのだ。

「見苦しい、気持ち悪い、暑苦しいの三拍子なんて揃えてんじゃないわよ」

那実が殴り飛ばした先を見据えて、毒づいた。

「何しやがるとは言わねえ。だが、限度を弁えろ！一瞬、河が見えたじゃねえか！！」

一秒もしないうちに氷我思は復活を果たし、すぐに立ち上がった。

「なんだ、そのまま行けば良かったのに」

「酷くね！？」

「酷くないわよ、あたしの独断だけど」

「勝手に物事を決めるな！！てか、幼馴染を殴るな！！」

「幼馴染なんて恥ずかしいこと言わないでよ、あたしの唯一の欠点なんだから」

「お前にはその暴力性という女子としての欠点があるだろ！！」

「で、何の話をしてたの？」

「まさかの無視！？」

氷我思の事など気にもとめず、刻の方を向いた。
「氷我思が遊びに行きたいんだとさ」
「だって、ラフアちゃんの歓迎会が出来なかったし、遊びたくもなるっての！！」
氷我思の声が聞こえてばつが悪くなったのか、ラフアが刻達の方へと急ぎ足でやってきた。
「あの、すみません……。私のせいで皆さんにご迷惑をお掛けしてしまったようで…」
「ラフアちゃんの所為じゃないわよ、こいつが唯単にバカなだけよ」
「でも…」
「いいのよ、別に。ほら、氷我思行くわよ」
那実が氷我思を呼ぶと氷我思は立ち上がった。
「ちっ、今日も帰るだけか…」
「何言ってんの、遊びに行くに決まってるでしょ。あたしが付き合ってあげるんだから感謝しなさいよ？」
「えーお前とー？」
「あら、何？あたしとじゃ『嫌』だとでも言うのかしら？仁思　氷我思君？」

那実は笑みを浮かべながら、――――ただし、目は笑っていない、氷我思に問かけた。

那実の恐ろしさから、氷我思はこのまま断ったりでもしたら間違いなく酷い目（暴力系の）にあうことが容易に想像できた。

「い、いや、そ、そんなことは無いぜ？すっごく嬉しいんだがな、た、唯、お前とだけってのも人数的に寂しいなー、って思っただけで、ほら、俺ってたくさんの人と遊ぶのが好きだからさ、そうだ、磨輝達も一緒に行こうぜ？そうだ、それがいい、そうに決まっている。うんうん」

矢継ぎ早にそう言うと、一人で勝手に頷き始めてしまった。

那実は氷我思を視界から外し未だに刻の背中に張り付いている磨輝の方を向いた。

「どうする、磨輝？アイツもああ言ってるし、一緒に来ない？」

那実が磨輝に言うと、

「もちろん、行くよ！！今日は歌いまくるよー！ブレくん、ライドモード！」

「了解したでござる」

磨輝が剣吾に戦隊ヒーロー物の掛け声の様に言うと、剣吾は磨輝を肩車した。

「よかったな、氷我思、さっきも言ったが、俺は用事があるから帰らしてもらうよ」

磨輝達が一緒に遊びに行ってくれれば、刻が行く必要性は余り無くなる。

「おう、じゃあなまた明日」

「また明日」

そして刻は教室を早足で出て行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0034u/

最高位だった堕天使の置き土産

2011年11月17日04時25分発行